

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部の設置							
フリガナ設置者	カクヨウホクジン メイセイケン 学校法人 明星学苑							
フリガナ大学の名称	メイセイダイガク 明星大学 (Meisei University)							
大学本部の位置	東京都日野市程久保2丁目1番地1号							
大学の目的	<p>明星大学は、設置者である学校法人明星学苑の建学の精神である「和の精神のもと、世界に貢献する人を育成する」に基づき、広い教養と深い専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、自己実現を目指し、社会に貢献する人を育成することを目的とする。この目的を実現するための教育研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。</p>							
新設学部等の目的	<p>心理学部では、実践的教養としての心理学に関する専門的知識及び技能をもって社会に貢献できる人材を養成する。具体的には、①人間一般の特性を心理学的に評価・理解する技能・手法を身につけた人材、②社会集団の特性を心理学的に評価・理解する技能・手法を身につけた人材、③青年期・成人期を対象としたアセスメント及びカウンセリングの理論と技能を身につけた人材、④幼児期・児童期を対象としたアセスメント及び臨床的介入の理論と技能を身につけた人材を養成する。</p>							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	心理学部 [School of Psychology]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	東京都日野市程久保 2丁目1番地1号
	心理学科 [Department of Psychology]	4	120	—	480	学士(心理学)	平成29年4月 第1年次	
	計		120	—	480			
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<p>人文学部 心理学科 (廃止) (△110)                      ※平成29年4月学生募集停止                      教育学部 教育学科 [定員増] ( 30) (平成29年4月)                      経済学部 経済学科 [定員減] (△ 40) (平成29年4月)</p>							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
	心理学部 心理学科	講義	演習	実習	計	124単位		
		161科目	81科目	3科目	245科目			

教 員 組 織 の 概 要	学 部 等 の 名 称		専任教員等					兼任 教員等
			教授	准教授	講師	助教	計	
新 設 分	心理学部 心理学科	人	人	人	人	人	人	人
			7 (7)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)
	計	7 (7)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	- (-)
既 設 分	理工学部 総合理工学科	37 (37)	15 (15)	2 (2)	2 (2)	56 (56)	0 (0)	81 (81)
	人文学部 国際コミュニケーション学科	8 (8)	3 (3)	10 (10)	1 (1)	22 (22)	0 (0)	13 (13)
	人間社会学科	6 (6)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	10 (10)	0 (0)	17 (17)
	日本文学学科	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	19 (19)
	福祉実践学科	7 (7)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	17 (17)
	経済学部 経済学科	17 (17)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	25 (25)	0 (0)	16 (16)
	情報学部 情報学科	10 (10)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	22 (22)
	教育学部 教育学科	35 (35)	33 (33)	1 (1)	3 (3)	72 (72)	0 (0)	98 (98)
	教育学部 教育学科 (通信課程)							
	経営学部 経営学科	8 (8)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	15 (15)
	デザイン学部 デザイン学科	8 (8)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	37 (37)
	全学共通教育	23 (23)	8 (8)	0 (0)	1 (1)	32 (32)	0 (0)	99 (99)
	明星教育センター	2 (2)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	0 (0)
	連携研究センター	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
	計	167 (167)	106 (106)	14 (14)	8 (8)	295 (295)	0 (0)	- (-)
	合 計	174 (174)	110 (110)	14 (14)	9 (9)	307 (307)	0 (0)	- (-)
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計	
	事 務 職 員		人		人		人	
			141 (141)		147 (147)		288 (288)	
	技 術 職 員		0 (0)		94 (94)		94 (94)	
	図 書 館 専 門 職 員		2 (2)		0 (0)		2 (2)	
	そ の 他 の 職 員		0 (0)		2 (2)		2 (2)	
	計		143 (143)		243 (243)		386 (386)	
校 地 等	区 分	専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計	
	校 舎 敷 地	197,697㎡	0㎡		0㎡		197,697㎡	
		683,812㎡	0㎡		0㎡		683,812㎡	
	運 動 場 用 地	74,314㎡	0㎡		0㎡		74,314㎡	
		94,320㎡	0㎡		0㎡		94,320㎡	
	小 計	272,011㎡	0㎡		0㎡		272,011㎡	
		778,132㎡	0㎡		0㎡		778,132㎡	
	そ の 他	17,243㎡	0㎡		0㎡		17,243㎡	
18,621㎡		0㎡		0㎡		18,621㎡		
合 計	1,086,007㎡	0㎡		0㎡		1,086,007㎡		
								大学全体
								大学全体

校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	・日野校 ・青梅校 大学全体					
	179,251㎡ (179,251㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	179,251㎡ (179,251㎡)						
	32,714㎡ (32,714㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	32,714㎡ (32,714㎡)						
合 計	211,965㎡ (211,965㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	211,965㎡ (211,965㎡)	大学全体					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	・日野校 ・青梅校 大学全体				
	92室	179室	231室	19室 (補助職員 6人)	2室 (補助職員 2人)					
	23室	8室	36室	1室 (補助職員 0人)	0室 (補助職員 0人)					
	115室	187室	267室	20室 (補助職員 6人)	2室 (補助職員 2人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数		大学全体				
		心理学部 心理学科		13室						
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書:870,513冊 〔279,861冊〕 学術雑誌:11,751種 〔11,108種〕		
	心理学部 心理学科	25,600 [5,150] (24,000 [5,100])	647 [545] (647 [545])	261 [261] (261 [261])	85 (75)	1,100 (1,100)	2 (2)			
	計	25,600 [5,150] (24,000 [5,100])	647 [545] (647 [545])	261 [261] (261 [261])	85 (75)	1,100 (1,100)	2 (2)			
図書館		面積	閲覧座席数		取 納 可 能 冊 数			・日野校 ・青梅校 大学全体		
		16,865㎡	847席		1,526,000冊					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
		8,006㎡	野球場、テニスコート							
		4,928㎡	野球場、テニスコート							
		12,934㎡								
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は 大学全体  図書購入費には電子 ジャーナル・データベ ースの整備費(運用コ スト含む)を含む  設備購入費は 大学全体
		教員1人当り研究費等		400千円	400千円	400千円	400千円	—	—	
		共同研究費等		40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	—	—	
		図書購入費	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	—	—	
		設備購入費	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	—	—	
	学生1人当り納付金	学部	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		心理学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	—千円	—千円		
		理工学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	—千円	—千円		
		人文学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	—千円	—千円		
		経済学部	1,200千円	950千円	950千円	950千円	—千円	—千円		
		情報学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	—千円	—千円		
		教育学部	1,400千円	1,150千円	1,150千円	1,150千円	—千円	—千円		
		教育学部 (通信課程)	144千円	114千円	114千円	114千円	—千円	—千円		
経営学部	1,200千円	950千円	950千円	950千円	—千円	—千円				
デザイン学部	1,590千円	1,340千円	1,340千円	1,340千円	—千円	—千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、資産運用収入及び私立大学等経常経費補助金 等							

既設大学等の状況	大学の名称		明星大学						所在地
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	
	(学部) 理工学部	年	人	年次人	人		倍		東京都日野市 程久保2丁目1番地1号
	総合理工学科	4	400	—	1,600	学士(理学) 学士(工学)	1.05	平成22年度	
	化学科	4	—	—	—	学士(理学)	—	昭和39年度	平成22年4月より 学生募集停止
	機械システム工学科	4	—	—	—	学士(工学)	—	平成17年度	(化学科・機械システム工学科・環境システム学科)
	環境システム学科	4	—	—	—	学士(工学)	—	平成17年度	
	人文学部						1.11		
	国際コミュニケーション学科	4	100	—	400	学士(国際コミュニケーション学)	1.17	平成17年度	
	人間社会学科	4	80	—	320	学士(社会学)	1.05	昭和40年度	
	心理学科	4	110	—	440	学士(心理学)	1.11	平成22年度	
	日本文化学科	4	100	—	400	学士(文学)	1.12	平成22年度	
	福祉実践学科	4	60	—	240	学士(社会福祉学)	1.05	平成22年度	
	心理・教育学科	4	—	—	—	学士(心理学) 学士(教育学)	—	昭和40年度	平成22年4月より 学生募集停止 (心理・教育学科)
	経済学部						1.08		
	経済学科	4	300	—	1,200	学士(経済学)	1.08	平成13年度	
	経営学科	4	—	—	—	学士(経営学)	—	平成17年度	平成24年4月より 学生募集停止 (経営学科)
	情報学部						1.05		
	情報学科	4	140	—	590	学士(情報)	1.05	平成17年度	平成26年4月より 入学定員変更(情報 学科170→140)
	日本文化学部						—		
	言語文化学科	4	—	—	—	学士(文学)	—	平成4年度	平成22年4月より 学生募集停止 (日本文化学部言語文化 学科)
	造形芸術学部						—		
	造形芸術学科	4	—	—	—	学士(芸術)	—	平成17年度	平成26年4月より 学生募集停止 (造形芸術学部造形芸術 学科)
	教育学部						1.19		
	教育学科	4	320	—	1,280	学士(教育学)	1.19	平成22年度	
	経営学部						1.07		
	経営学科	4	200	—	800	学士(経営学)	1.07	平成24年度	
	デザイン学部						1.05		
	デザイン学科	4	120	—	360	学士(デザイン学)	1.05	平成26年度	
	(通信教育部) 教育学部						0.06		
	教育学科 (通信課程)	4	2,000	—	8,000	学士(教育学)	0.06	平成22年度	
	人文学部						—		
	心理・教育学科 (通信課程)	4	—	—	—	学士(教育学)	—	昭和42年度	平成22年4月より 学生募集停止 (人文学部心理・教 育学科(通信課程))

	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
既設大学等の状況	(大学院)								東京都日野市程久保2丁目1番地1号	
	理工学研究科						<b>0.49</b>			
	(博士前期課程)									
	物理学専攻	2	10	—	20	修士(理学)	0.20	昭和54年度		
	化学専攻	2	10	—	20	修士(理学)	1.15	昭和48年度		
	機械工学専攻	2	10	—	20	修士(工学)	0.30	昭和55年度		
	電気工学専攻	2	10	—	20	修士(工学)	0.15	昭和54年度		
	建築・建設工学専攻	2	5	—	10	修士(工学)	0.20	平成20年度		
	環境システム学専攻	2	5	—	10	修士(工学)	1.10	平成20年度		
	(博士後期課程)						<b>0.04</b>			
	物理学専攻	3	5	—	15	博士(理学)	0.06	昭和56年度		
	化学専攻	3	5	—	15	博士(理学)	0.13	昭和51年度		
	機械工学専攻	3	5	—	15	博士(工学)	0.00	昭和57年度		
	電気工学専攻	3	5	—	15	博士(工学)	0.00	昭和56年度		
	建築・建設工学専攻	3	3	—	9	博士(工学)	0.00	平成20年度		
	環境システム学専攻	3	2	—	6	博士(工学)	0.00	平成20年度		
	人文学研究科							<b>0.53</b>		
	(博士前期課程)									
	英米文学専攻	2	10	—	20	修士(英米文学)	0.35	昭和58年度		
	社会学専攻	2	10	—	20	修士(社会学)	0.10	昭和46年度		
	心理学専攻	2	10	—	20	修士(心理学)	1.15	昭和49年度		
	教育学専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和47年度		
	(博士後期課程)						<b>0.11</b>			
	英米文学専攻	3	3	—	9	博士(英米文学)	0.00	昭和63年度		
	社会学専攻	3	3	—	9	博士(社会学)	0.11	昭和51年度		
	心理学専攻	3	3	—	9	博士(心理学)	0.22	昭和53年度		
	教育学専攻	3	—	—	—	博士(教育学)	—	昭和49年度		
	経済学研究科							<b>0.20</b>		
	(修士課程)									
	応用経済学専攻	2	10	—	20	修士(応用経済学)	0.20	平成18年度		
情報学研究科							<b>0.42</b>			
(博士前期課程)										
情報学専攻	2	7	—	14	修士(情報学)	0.42	平成10年度			
(博士後期課程)						<b>0.11</b>				
情報学専攻	3	3	—	9	博士(情報学)	0.11	平成12年度			
教育学研究科							<b>0.05</b>			
(博士前期課程)										
教育学専攻	2	10	—	20	修士(教育学)	0.05	平成26年度			
(博士後期課程)						<b>0.00</b>				
教育学専攻	3	3	—	9	博士(教育学)	0.00	平成26年度			

平成26年4月より  
学生募集停止  
(教育学専攻)

平成26年4月より  
学生募集停止  
(教育学専攻)

既設大学等の状況	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	(通信制大学院) 教育学研究科						<b>0.64</b>		
	(博士前期課程) 教育学専攻 (通信課程)	2	30	—	60	修士(教育学)	0.64	平成11年度	
(博士後期課程) 教育学専攻 (通信課程)	3	3	—	9	博士(教育学)	1.21	1.21	平成18年度	
附属施設の概要	該当なし								



科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
全学共通科目	日本語 2 A	1・2後		1			○							兼1
	日本語 2 B	1・2後		1			○							兼1
	情報リテラシー a	1・2・3・4前	2				○							兼1
	情報リテラシー b	1・2・3・4後	2				○							兼1
	言語学 1	1・2・3・4前		2			○							兼1
	言語学 2	1・2・3・4後		2			○							兼1
	言葉の思想	1・2・3・4前		2			○							兼1
	科学コミュニケーション論	1・2・3・4前		2			○							兼1
	映画と音楽で学ぶ英語	1・2・3・4前		2			○							兼1
	異文化体験	1・2・3・4前		2			○							兼1
	異文化で学ぶ英語	1・2・3・4後		2			○							兼1
	外国語(英語) 3 A	2・3前		1				○						兼5
	外国語(英語) 3 B	2・3前		1				○						兼5
	外国語(英語) 4 A	2・3後		1				○						兼5
	外国語(英語) 4 B	2・3後		1				○						兼5
	外国語(ドイツ語) 3 A	2・3前		1				○						兼1
	外国語(ドイツ語) 3 B	2・3前		1				○						兼1
	外国語(ドイツ語) 4 A	2・3後		1				○						兼1
	外国語(ドイツ語) 4 B	2・3後		1				○						兼1
	外国語(フランス語) 3 A	2・3前		1				○						兼1
	外国語(フランス語) 3 B	2・3前		1				○						兼1
	外国語(フランス語) 4 A	2・3後		1				○						兼1
	外国語(フランス語) 4 B	2・3後		1				○						兼1
	外国語(中国語) 3 A	2・3前		1				○						兼1
	外国語(中国語) 3 B	2・3前		1				○						兼1
	外国語(中国語) 4 A	2・3後		1				○						兼1
	外国語(中国語) 4 B	2・3後		1				○						兼1
	外国語(韓国語) 3 A	2・3前		1				○						兼1
	外国語(韓国語) 3 B	2・3前		1				○						兼1
	外国語(韓国語) 4 A	2・3後		1				○						兼1
	外国語(韓国語) 4 B	2・3後		1				○						兼1
	日本語 3 A	2・3前		1				○						兼1
	日本語 3 B	2・3前		1				○						兼1
	日本語 4 A	2・3後		1				○						兼1
	日本語 4 B	2・3後		1				○						兼1
	上級英語 1	3・4前		1				○						兼1
	上級英語 2	3・4後		1				○						兼1
	上級ドイツ語 1	3・4前		1				○						兼1
	上級ドイツ語 2	3・4後		1				○						兼1
	上級フランス語 1	3・4前		1				○						兼1
	上級フランス語 2	3・4後		1				○						兼1
	上級中国語 1	3・4前		1				○						兼1
	上級中国語 2	3・4後		1				○						兼1
	上級韓国語 1	3・4前		1				○						兼1
	上級韓国語 2	3・4後		1				○						兼1
上級英語 3	4前		1				○						兼1	
上級英語 4	4後		1				○						兼1	
上級ドイツ語 3	4前		1				○						兼1	
上級ドイツ語 4	4後		1				○						兼1	
上級フランス語 3	4前		1				○						兼1	
上級フランス語 4	4後		1				○						兼1	
上級中国語 3	4前		1				○						兼1	
上級中国語 4	4後		1				○						兼1	
上級韓国語 3	4前		1				○						兼1	





科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
全学共通科目	情報法制論	2・3・4前		2		○									兼1
	地球惑星学1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	地球惑星学2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	科学技術論1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	科学技術論2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	統計学1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	統計学2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	基礎数学1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	基礎数学2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	生物学1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	生物学2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	物理学1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	物理学2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	化学1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	化学2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	自然科学入門1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	自然科学入門2	1・2・3・4後		2		○									兼1
	生物学3	2・3・4前		2		○									兼1
	生物学4	2・3・4後		2		○									兼1
	人類と環境	2・3・4前		2		○									兼1
	特別講義1	1・2・3・4前		2		○									兼1
	特別講義2	1・2・3・4前		1		○									兼1
	特別講義3	1・2・3・4後		2		○									兼1
特別講義4	1・2・3・4後		1		○									兼1	
	小計 (181科目)	—	9	279	0	—				2	0	0	0	0	兼77
職業学的共通社会進的科目	自立と体験3	2後			2	○									兼3
	自立と体験4	3前			2	○									兼3
	ボランティア実践1	2前			1		○								兼1
	ボランティア実践2	2後			1		○								兼1
	キャリアデザイン1	1後			2	○									兼2
	キャリアデザイン2	2後			2	○									兼1
	小計 (6科目)	—	0	0	10	—				0	0	0	0	0	兼4

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 科 目	基礎科目	自立と体験2	1後	2			○			7	4		1		兼5 兼5 オムニバス 兼4 兼4 兼6 兼6
		心理学概論A	1前・後	2			○						1		
		心理学概論B	1前・後	2			○			1					
		心理統計法1	1前	2			○				1				
		心理統計法2	1後	2			○				1				
		心理学研究法	1前・後	2			○			4	1				
		心理学実験法	2前・後	2			○			1					
		心理学実験法実習	2前・後	2					○	1					
		心理学検査法	2前・後	2			○								
		心理学検査法実習	2前・後	2					○						
	小計(10科目)	—	20	0	0	—			7	4	0	1	0	兼15	
	基礎科目	比較心理学	1前・後		2			○			1				兼1
		産業心理学	1前・後		2			○			1				
		児童心理学	1前・後		2			○							
障害児(者)心理学		1前・後		2			○			1					
基礎臨床心理学		1前・後		2			○			1					
性格心理学		1前・後		2			○			1					
知覚心理学		2前・後		2			○			1					
学習心理学		2前・後		2			○				1				
神経心理学		2前・後		2			○			1					
社会心理学		2前・後		2			○			1					
青年心理学		2前・後		2			○			1					
生涯発達心理学		2前・後		2			○			1					
発達臨床心理学		2前・後		2			○			1					
学校臨床心理学	2前・後		2			○				1					
小計(14科目)	—	0	28	0	—			7	4	0	1	0	兼1		
発展科目	人間科学	聴知覚心理学	3前		2			○		1				兼1	
		運動視知覚心理学	3後		2			○							
		実験的行動分析学	3前		2			○				1			
		比較認知科学	3後		2			○			1				
		認知神経心理学	3前		2			○			1				
		臨床神経心理学	3後		2			○							
	産業・社会	社会的認知論	3前		2			○			1			兼1 兼1 兼3 兼1	
		社会行動論	3後		2			○							
		消費者行動論	3前		2			○			1				
		組織心理学	3後		2			○							
		心理学調査法	3前		2			○			1				
		人間関係発達論	3前		2			○							
		カウンセリング	カウンセリング技法論	3前		2			○			1			
	カウンセリング実践論		3後		2			○							
	認知行動療法技法論		3前		2			○			1				
	認知行動療法実践論		3後		2			○							
	犯罪心理学		3前		2			○							
性格心理学実践論	3前			2			○								
心理臨床支援技法論	3前			2			○			1					
発達支援	こども心理療法論	3後		2			○						兼1 兼1		
	応用行動分析学	3前		2			○			1					
	社会環境行動論	3後		2			○								
	発達障害児教育論	3後		2			○			1					
	発達障害者自立支援論	3後		2			○			1					
小計(24科目)	—	0	48	0	—			7	4	0	1	0	兼14		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
臨床実践科目	心理面接実習	3前・後		2				○							兼3
	臨床心理学概論	3前		2			○			3	2				オムニバス
	精神医学概論	3後		2			○								兼1
	心理臨床・実践職能論	3後		2			○			1	1				
	小計(4科目)	—	0	8	0		—		3	2	0	0	0	兼4	
キャリア形成科目	心理学で拓くキャリア	3前		2			○			1	1				
	小計(1科目)	—	0	2	0		—		1	1	0	0	0	0	
研究実践科目	専門演習1A	3前	1					○		7	4		1		
	専門演習1B	3後	1					○		7	4		1		
	専門演習2A	4前	1					○		7	4		1		
	専門演習2B	4後	1					○		7	4		1		
	卒業研究	4通	8					○		7	4		1		
	小計(5科目)	—	12	0	0		—		7	4	0	1	0	0	—
合計(245科目)		—	41	365	10		—		7	4	0	1	0	兼104	—
学位又は称号		学士(心理学)			学位又は学科の分野			文学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
全学共通科目から32単位以上、学科科目から必修科目32単位を含む92単位以上、合計124単位以上修得すること。 〔履修科目の登録の上限：45単位(年間)〕							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

授 業 科 目 の 概 要			
(心理学部 心理学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学 共通 科目	自立と体験1	本学の教育目標を達成する最初の科目であり、自己実現の第一歩として設ける。初年時教育の一環として、新入生全員を対象に行う。30人程度のクラスを4～5班に分け、グループワークを通じて他者とのコミュニケーションスキルを向上させるとともに、最終的には「自分史」を執筆することにより自らの目標を明確化させて大学生としての自覚・自立を促していくことを目的とする。	
	哲学1	哲学は、時代・地域に限定されない根源的な考察を展開する思考の営みである。そのために哲学は、人間の知的・文化的活動にかかわる広範囲な分野に繋がっている。本講義では、文学や芸術、宗教なども素材としながら、哲学という思考の大筋を理解できるようにしたい。「哲学とは何か」という基本的な問題から始まって、哲学において用いられる術語や概念などに馴れ親しむことができるように、原典の解説などを含めて、哲学の基本的な考え方を紹介する。	
	哲学2	「他者」とは何か。他人が気にならない人はいない。我々が日常味わうストレスは、詰まるところ他人との関係に起因している。また、時に我々は、誰も見ていないのに誰かに見られているという思いにとりつかれる。このどこからやってくるのか分からない「視線」は、高ずれば人の神経・精神を侵すに至る。「他人・他者」とは、我々の生き方に根底において関わってくる何ものかである。この問題について、主にフロイトとラカンの精神分析的な立場から幾人かの哲学者・文学者の観点について検討する。	
	倫理学1	行為の善悪に深くかかわる倫理学の問題は、同時に人間の生への問いでもある。有限な人間が、自分自身を凌駕し拘束する規範や原理へと応じるという課題がそこには含まれるからである。「自分とは何か」といった根本的な問いかけから始まり、他者との関係、世界との関係へと展開する人間の生の活動全般が、ここでの考察対象である。ヨーロッパの倫理学を中心としながら、人間の基本的条件やその存在のあり方を深く考えることを目的とする。	
	倫理学2	私たちは「生活」上の、より多く幸福、より少なく不幸などといった比較級に現を抜かしている。その生ぬるい比較級に意識を奪われている。私たちは「人生」の幸福を忘れて生きている。最上級（それは比較級の極まったものに過ぎない）というより、むしろ原級の幸福を忘れている。「人間よ、何故幸福を求めて先を急ぐ。彼は知らないのである。立ち止まれば、その場で幸福であるのに。」このことは、社会学や心理学の対象比較研究では暗点となっている。ひとり反省の学・倫理学のみがこれを考える。	
	論理学1	本講義は、思考の基礎をなす論理を対象とする。私たちが何かあることがらについて考えている場合、そこでは何らかの「推論」が行われている。そして、推論には正しい推論と正しくない推論がある。この授業では、正しい推論とはどのようなものか、そして正しい推論を行うためには何が必要なのかを理解し、正しい推論と誤った推論を区別する能力を身に着けることを目標とする。論理的な思考について理解を深め、正確な文章読解の力を養うことが狙いとなる。論証のタイプの相違なども理解したうえで、論理的思考力の広がりや深まりを期したい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	論理学 2	本講義では、論理学の基礎を、記号や推論方式の区別などを素材に、一貫して理解することを目的とする。そのために、通常の記事を記号によって表現する能力を習得し、真理表を作成するなど、論理学の基本的手順を解説する。論理学に関するこうした形式的な手順を習得することによって、正しい推論と正しくない推論を明確に区別し、論理的に一貫した思考の習慣を身につけることを目指す。	
	宗教学 1	宗教学とは何か、そもそも宗教学はどのような出自を持ち、どのように展開してきた学問なのか。本講では、宗教学の成り立ち、その構造を確認するとともに、宗教現象を、信じる者、信じる対象、その両者を結ぶ媒介としての象徴・儀礼から構成されるものと考え、そのそれぞれに即して、宗教学の立場からその見方を提示する。	
	宗教学 2	宗教とは何か、という問題を、宗教哲学的に（例えば、宗教と悪の問題）、宗教社会学的に（例えば、宗教と現代社会・世俗化概念の意味とその帰趨）など、さまざまな角度から検討し、人間と宗教の関わり、人間にとって宗教の意味とその役割などについて理解を深める。	
	美学 1	美や芸術に関わる重要な概念、主題、思想を取り上げ、具体例を交えながら解説する。「作品」や「表現」など、日常的に用いられる言葉が、美学・芸術学のなかではどのように理解され、またその理解にどのような変遷と広がりがあるかを解説する。そのために、伝統的な美や芸術のみならず、革新の著しい現代の美や芸術に関わる諸問題も取り上げたい。そして、古今東西の美や芸術の諸現象について一般的な理解を深めていくことで、私たちが生きる現代の感性とは何かを探ることを目標とする。	
	美学 2	一方に真善美正利快の序列の中に確とした位置を占める古典美がある。美と快についてのみ「感」がつく。即ち、美感、快感。（正義感とは正義漢の誤用）ニヒリズムの中でニーチェは、最下位の「快」こそ生命の高揚であるという。とすれば「美」の位置はどうなるのか。古典美においては知性X感性の図式内で考えられてきた。位置の揺らいだ「美」は元の位置に戻されねばならぬ。それが、遡って十七世紀、知性の学に倣う感性の学aesthetics即ち美学の誕生であった。こうした学は可能か。むしろ日本的な「感」にこそ、その可能性があるのではないか、これを探る講義である。	
	心理学 1	心理学の基本的な考えを理解した上で、実証的な心理学に対する興味や関心を高めることが、本講義の目的である。講義では、知覚心理学、思考心理学、感情心理学、社会行動心理学等を通して、人がなぜ誤ったり騙されたりするかについて、「誤り」、「エラーとバイアス」、「騙し」をキー概念にして、人の情報処理過程について心理学の様々な領域について解説していく。日常生活で経験する「誤り」について知ることで、人の情報処理過程についての理解を深め、日常生活で間違えたり騙されたりしないためにいかにすべきかについて自分で考えられる力を付ける。	
	心理学 2	心理学は、自分ではその存在を確信できるのに、いざ客観的に考えようとする、捉えどころがないように感じられる心の問題を科学的に解明するものである。心理学にはどのような分野があり、それらの分野で心の問題がどのように扱われているのかについて、実験心理学を中心に知覚、学習、認識、発達の順序で講義を行う。一般的には、心理学は実際には広範な研究分野があり、それらの具体的な考え方とそこから明らかにされた心の様々な側面を理解することで、心についての考えを深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	教育学 1	<p>当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、教育の目的、子供の成長と教育、主にルソーの近代教育思想、デューイ等の現代教育思想、近代学校教育制度の発展の歴史等の順序で講義を行う。なお、現代は教育問題が山積し、教育の制度改革が急激なので、時事的な教育問題について関心を持ち、日頃から自分の考えを形成することを達成目標とする。</p>	
	教育学 2	<p>当科目の教育目標は、歴史的展開を理解すること、法規的・制度的に理解すること、行政的に理解すること、教育思想史的に理解すること、社会問題的に理解すること、以上の5点にあるが、授業では、各国の学校教育制度と教育改革、日本の学校教育制度との比較、現代教育の課題と改革、教育行政の諸問題等の順序で講義を進める。なお、現代は教育問題が山積しているが、現代の教育問題を憲法、教育基本法、学校教育法その他の教育法規的視点および教育の歴史的観点から考えることを達成目標とする。</p>	
	倫理学 3	<p>現在、生命倫理や環境倫理などさまざまな場面で倫理的思考が要求されるようになった。このような状況を受けて、倫理の基本について学ぶことを目的とする。安楽死やインフォームド・コンセント、現代の環境破壊など、具体的で切迫した問題を手がかりとして、現代における倫理学の展開を考える。加えて、文学や歴史など教養の根底にある倫理的思考を考察する。</p>	
	倫理学 4	<p>人間の生のあり方を問う倫理学は、原理的な考察を要求すると同時に、その時代に応じた具体的問題との取り組みが迫られる領域でもある。そのために、人間が実際に生きている社会や歴史をどのように考えるかという問いは、倫理学の重要な問題となる。現代の倫理学にとっては、戦争と平和の問題、グローバリゼーションへの応答などが不可欠である。本講義では、基本的な社会論・歴史論を概観したうえで、現代固有の問題を考察する。</p>	
	美学 3	<p>現代の美術・芸術は、既成の価値観や美意識を覆し、新たな美的感性に訴えかけるものとなっている。きわめて難解な前衛芸術から始まり、新たな技術的手段に支えられたコンピュータ・アートやグラフィック、または伝統的には美の対象にならなかった主題までが、現代では美学の対象となっている。ファッションやサブカルチャーなど、現代の多彩な展開を見据えながら、美学の新たな方向と可能性を探っていく。</p>	
	美学 4	<p>有史以前から人間は洞窟壁画や舞踏をはじめ、表現活動を文化の一部として繰り返してきた。本講義では、狭義の芸術に限らず、人間の表現活動全般を多角的に考察することにする。建築・音楽・舞踏・舞台芸術・文学・絵画など、人間の表現活動はきわめて多彩であり、そこには宗教や思想、政治などが複雑に絡み合っている。そうした多様で複雑な文化的営為を「表現」というキーワードで広く考えることを目的とする。</p>	
	哲学 3	<p>哲学の歴史とは、それぞれの歴史的時代の具体的状況の中で、人間が哲学的思索を行った足跡を如実に示すものである。そこから、それぞれの時代や状況が提起を知ることができる。本講義では、そうした哲学の歴史的展開を、主にヨーロッパ哲学を中心に概観する。古代・中世・近代へと時代が進むに従って、どのような問題意識が現れ、それが現代にとってどのような意味をもつのかを考察していく。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	哲学 4	フロイト『精神分析入門』の第1部「錯誤行為」と第2部「夢」を中心に扱う。フロイトの言う無意識というものが人間の生活においてどのような意義をもっているか、具体的にフロイトの文章を辿りながら検討する。神経症に対する臨床的な医療行為から始まった精神分析が、人間についての深い洞察に支えられた一つの倫理思想であることが理解されるだろう。	
	思想への招待	哲学・倫理学・宗教学・美学など、人文系の思想科目について、広く全般的な案内となることを目標として、それぞれの分野での中心的思想家・著作を紹介していく。抽象的で難解と思われがちな思想・哲学を、なるべく多くの学生が親しみをもてるようなかたちで展開し、初年次用の導入科目とする。	
	健康・スポーツ科学論	現代社会を生きる人々にとって、心と体の健康を維持することは豊かな生活基盤を築く上で大切な課題である。その為には、自らの心や体に対する知識や理解、健康的ライフスタイルの創造(思考・判断力)など「生きる力」を高めるための総合的な学力の獲得が必要である。授業では、運動生理学や健康科学、栄養学、スポーツ科学などの知見を活かしながら講義を展開し、健康を実践的に維持・向上させるための学力の獲得をめざす。	
	健康・スポーツ演習 1	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目選択し、各スポーツ種目の実践を通して、思考力・判断力・コミュニケーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために、学生一人一人が自己の興味や能力に応じた課題を持ち、目的によっては、グループで協力して、スポーツの実践や調査、測定・分析などを行ない、最後に成果についてレポートなどによって報告する。本演習を通じて、健康で活動的な生活を送るための、運動やスポーツ実践の意義や重要性について理解することを目的とする。	
	健康・スポーツ演習 2	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目選択し、各スポーツ種目の実践を通して、思考力・判断力・プレゼンテーション能力を向上させていくことをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んだ課題をさらに発展、あるいは、新しい課題に挑戦するなどして、スポーツの実践や調査、測定・分析などを行ない、最後に成果についてレポートを提出する。本演習を通じて、生涯にわたって主体的に運動やスポーツに取り組むことのできる姿勢を育てることを目的とする。	
	健康・スポーツ演習 3	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目を選択し、各種スポーツの実践を通して知識・思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力などを向上させることをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ、選択したスポーツ種目と関連した調査、測定・分析などを行ない、その結果について、自己の考えや仲間の考えをまとめるなどしてレポート提出する。本演習を通じて、身体能力の育成に努めるとともに、生涯にわたって自らが主体的、意欲的に仲間とともに運動やスポーツに関わることが出来る姿勢を育てることを目的とする。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	健康・スポーツ演習4	本演習では、バスケットボール、太極拳、剣道、リズムダンス、トレーニングなど各種スポーツの中から1種目を選択し、各種スポーツの実践を通して思考力・判断力・表現力・リーダーシップ能力などを向上させることをねらいとする。そのために、学生は「健康・スポーツ演習」で取り組んできた課題をさらに発展させ、体験的事実を正確に理解したり、情報を分析・評価し、論述したりする。さらには、課題について、構想を立て実践し、評価・改善することができるようにする。本演習を通じて、学生自らが身体能力の育成に努めるとともに、4年間の演習授業の経験を生かし、卒業後も地域や職場の仲間とともに計画的・継続的な運動環境の調整に関わることができる力を培うことを目的とする。	
	外国語（英語）1A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。 英語1Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）1B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語1Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を展開していく自律性が求められる。	
	外国語（英語）2A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語2Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語1Aをさらに発展させ、特に「読む・書く」技能を伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上の個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現していく。	
	外国語（英語）2B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語2Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、英語1Bをさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能を伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語）1A	1Aは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。本科目履修後はドイツ語2Aを履修することが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）1B	1Bは初級者を対象にして1Aよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文などの練習をつうじて理解を深める。本科目履修後は、ドイツ語2Bを履修することが望ましい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（ドイツ語）2 A	2 Aは初級者を対象にしてドイツ語文法の説明と理解を中心におく授業である。テキストもそれに見合ったものが用意される。文法中心とはいえ平易なドイツ語文・会話などを発音、聞き取り、音読などをしながらドイツ文に親しんでゆく。音声・映像メディアなども駆使しつつ、ドイツ語を通して異文化理解を深める。ドイツ語1 Aの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（ドイツ語）2 B	2 Bは初級者を対象にして2 Aよりもドイツ語の文章に多く接することをねらいとしている。とはいえ、初心者が対象であるから文法項目も段階を追って進行する。1 Bで補い得ないもの、語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文、講読などの練習をつうじて理解を深める。ドイツ語1 Bの内容を受けて展開するため、同科目を履修済みであることが望ましい。	
	外国語（フランス語）1 A	フランス語の基礎の学習です。視聴覚教材を取り入れて、まず眼と耳でフランスとフランス語に接し、この1 Aでは初級文法の前半を学びます。2 Aと併せて、最終的にフランスとフランス語に親しみ、話し、読み、書くことの初歩をマスターすることが目標です。	
	外国語（フランス語）1 B	語学＋フランス文化。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（フランス語）2 A	「フランス語1 A」の学習を基礎にした初級文法の学習が中心になります。この2では、その後半を学びます。1 A同様に視聴覚教材を用いて、目と耳からフランス語を取り入れます。	
	外国語（フランス語）2 B	語学＋フランス文化。1 Bの続きです。コンピュータ教材を用いた初級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが目標です。	
	外国語（中国語）1 A	中国語学習の準備完了を目指す中国語入門クラスである。最も大切な中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行う。また同時に中国語入門の段階における中国語文法の初歩を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級レベルに到達できる簡単な日常挨拶語を約50～80を習得する。	
	外国語（中国語）1 B	中国語1 Bにおいても中国語の四声・ピンインの基礎的な練習から行うが、主として、基本的にはネイティブが担当するので、簡単な会話の練習に重点を置く。そして、やはり、当該授業を学習を学び終えた時には、正確な発音と基礎的な文法・語彙を習得し、平易な中国語を聞き、話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）2 A	中国語1 Aで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語入門から初級に至る段階における、中国語の語彙、文法を学び中国語の基礎をマスターし、簡単な中国語を聞き、話すことができるようになることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級から4級レベルに到達できることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（中国語）2 B	中国語2 Bにおいても中国語1 Bで学んだ中国語の基礎を復習をおこなうが、主としてネイティブが担当するので、中国語入門から初級の段階における中国語会話を学び終えた時には、比較的日常的な中国語会話を話すことができることを目標とする。当該授業においては、学生が中国語検定試験準4級から4級レベルに到達できるようにする。常用語500～1000による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳ができるようにする。	
	外国語（韓国語）1 A	韓国語は初習外国語の中でも文字（ハングル）とその発音を最初に学習する必要があるため、韓国語を母国語とする教師がおこなう外国語（韓国語1 B）との連携は必須である。連携することによって効果的な学習が出来る。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）1 B	韓国語を母国語とする教員によっておこなわれ、日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）1 Aと連携しつつ学習される。ハングルと発音の学習においてはネイティブの教師によって発音に注意される。最初に母音、次に子音、そして合成母音、最後に子音で終わるパッチムを学習する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。一応ハングルが読めるようになってから指定詞による肯定文と否定文の学習をおこなう。簡単だが基本的な文型となるのでしっかりと身につける。	
	外国語（韓国語）2 A	1 A、1 Bで学習したことを踏まえて基本的な文法事項の学習をおこなう。動詞、形容詞、存在詞による肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。また同時に語彙数を増やすことを目標とする。この授業は日本語を母国語とする教員によっておこなわれ、韓国語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）2 Bと連携しつつおこなわれる。助詞、数詞などの使い方についてもしっかりと学びたい。また文章や単語に現れる韓国の文化の特徴についても注意していきたい。	
	外国語（韓国語）2 B	日本語を母国語とする教員が担当する外国語（韓国語）2 Aと連携しつつおこなわれる。ネイティブによる授業であるので、特に発音に注意したい。また学習する内容に合わせた簡単な会話の練習なども取り入れた学習を行う。基本的な文法事項として、動詞、形容詞、存在詞の肯定文と否定文。尊敬の表現、過去形などについて学ぶ。	
	日本語1 A	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力一講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力一を定着させることを目標とする。講義を聴く技法、ノートをとる技法・情報の整理法、レポートを書く技法、発表する技法、資料・文献の収集法、レポートを書く技法を中心テーマとして取り上げて、テーマに沿った課題を出し、提出した課題を分析しながら授業を進める。	
	日本語1 B	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。語彙力、読解力を高め、新聞記事や短編小説の大意をつかみ、要約文や粗筋をまとめることができるレベルを目標とする。授業ではさまざまなジャンルの文章を多読・精読し、要約をまとめてもらう。また、映画やアニメーションを鑑賞しながら、その表現の特質を考えていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本語 2 A	「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力—講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力—を定着させることを目標とする。日本語 1 A で習得した技法を確認・復習しながら、授業で調査・研究結果の発表方法、論文を読む技法を検討する。さらに、実際に課題を決め、関連する課題図書を読んで、研究成果を発表するという形で授業を進める。	
	日本語 2 B	新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲などさまざまなメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。書く能力、発表能力の強化を図り、自分の意見や感想を的確に発表・記述できることを目標とする。授業では日本社会の幾つかのトピックスを取り上げ、関連する資料を読解しながら、質疑応答や討論を行った上で、各トピックスに対する感想文を提出し、それに対してフィードバックを行うという形で授業を進める。	
	情報リテラシー a	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシー a では、情報倫理と基本的なアプリケーションの基礎を中心に習得する。 ※Win基礎・情報倫理・情報検索・画像処理（Photoshop）・ホームページ作成（HTML）・Word基礎と応用	
	情報リテラシー b	この授業では、情報を適切に収集し、加工し、自ら情報を表現（発信）するまでの基礎的な技能や知識を学習し、さらに情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力の習得を目標としている。 情報リテラシー b では、情報処理の基礎と基本的なアプリケーションの基礎と応用力を中心に習得する。 ※情報処理の基礎・Excel基礎と応用・データベース体験（Access）・プログラミング体験（Basic）・PowerPoint基礎と応用・総合的な課題	
	言語学 1	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、言語学とは何か、音声学(母音・子音)、音韻論、音節構造、形態論、言語の類型、語彙と文法、統語論、ジャンル分析等について講義を行う。	
	言語学 2	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学を初め、あらゆる学問分野を通して考える。とくに、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来、構造、とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。授業では、語彙の意味論、意味と比喩、言語変種、言語の変化、言語獲得論、言語教育の前提、言語能力の評価、言語と人間性等について講義する。	
	言葉の思想	これは言語学の講義ではない。言語学は、言ってみれば、通時的或いは共時的に言葉を集めて標本化して、これを観察分類系統づけを行う。ここでは、言葉は死物である。言葉自身の抜け殻である。この講義は、「生」きた言葉を扱う。しかし社会的に「活」用されていればそれで生きた言葉ではない。むしろ言葉の発「生」の現場に立ち会おうとする講義である。と言ってもホモ・サピエンスの登場するはるか昔のことのことではない。今ここにたち現れる言葉について考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	科学コミュニケーション論	科学コミュニケーションは、一般に「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動」ととらえられている。本講義は、大学生の科学リテラシー向上を図るための教養教育の一科目として新規に開講するものであるが、狭義の「科学コミュニケーション」にとらわれることなく、人間以外の生物間コミュニケーションにおける“ことば”、人間と植物・微生物のコミュニケーション産物としての“うつくしさと文化”も主要テーマとして論じる。	
	映画と音楽で学ぶ英語	本授業の目的は、英語への興味関心を喚起し、英語学習への意欲を高めることである。学習者の多くが最も興味を持つ文化的分野として、音楽、スポーツ、アート等があるが、映画の中にはこれらの多様な文化が混在している。本授業は、特に映画のシナリオ（英語の会話）と音楽（英語の歌詞）の理解を通して、英語による表現法と様々な英語圏の文化とを学ぶ。映画と音楽が持つ、「人の心に訴える力」を牽引力に、学習者が英語を学ぶ魅力を十分に実感し、これを機に、積極的に英語に取り組むようになることを期待する。	
	異文化体験	<p>The purpose of this course is to prepare students for study trips abroad. It is expected that students taking this course will be studying abroad at one of Meisei's affiliated Universities at some time during the current academic year. The emphasis will be on developing coping strategies for living and functioning safely in a different culture where the language of communication is English. English will be the medium of instruction and such topics as Travel Information; Useful English for travel; Homestays; Comparative cultures and customs; Travel Documents; Insurance, health and safety will be covered. Students will be assessed on their participation, degree of understanding and preparation, and the successful completion of the study trip abroad.</p> <p>本講義は学生の海外研修旅行の準備を目的とする。受講者は研修旅行出発前に、異文化社会でのさまざまな場面における英語での対応や対処の仕方を学ぶ。講義は英語で行い、海外渡航及び滞在に必要な事柄についての知識、情報を得る機会とする。受講態度と講義内容の習得、及び研修旅行への参加により評価される。</p>	
	異文化で学ぶ英語	「言葉は文化である」と言われる。言葉と文化は一体なのか。分離することはできるのか。教養外国語への導入として、この科目では異文化をテーマにこの問題を追究ながら、英語という言語文化に迫る。言語は文化理解なしには解説することはできない。講義では、先ず、英語文化圏の生活文化を中心に探訪をする。主要な民族言語として英語が話される地域の衣食住について学び、英語文化を理解する。次に、異文化としての英語を探求する。日本語と対照しながら身の回りの言語事実から言葉のおもしろみを発見し、外国語への誘いとする。	
	外国語（英語）3A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語3Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（英語） 3 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語3 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も積極的にコミュニケーションをしていける技能が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（英語） 4 A	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語4 Aは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、日本人講師のもと、3 Aの内容をさらに発展させ、特に「読む・書く」技能をさらに伸張させる。授業中の学習に加え、それと同時間以上、個別学習を自己管理のもと実施し、日々の継続的学習を実現し、自分でさらに発展させていく。	
	外国語（英語） 4 B	全学共通で履修する英語授業で、英語の基礎基本を固めることにより、国際社会で生きる日本人としての基礎的英語力を身につけるとともに、3年生からの専門分野での英語にも対応できる地盤作りをする。英語4 Bは、4技能（聞く・読む・話す・書く）のすべてを学習対象とするが、外国人講師のもと、3 Bの内容をさらに発展させ、特に「聞く・話す」技能をさらに伸張させる。授業中も「積極的にコミュニケーションをしようとする態度」が求められ、授業外でも意欲的に学習を進展させていく自律性が求められる。	
	外国語（ドイツ語） 3 A	3 Aの履修者は既に1 A・2 Aを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けることもねらいとしたい。同4 Aもこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語） 3 B	3 Bの履修者は既に1 B・2 Bを履修済みであることがのぞましく、さらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心である。さまざまな読み物が教材となりうる。3 Aよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。同4 Bについてもその延長上にある。	
	外国語（ドイツ語） 4 A	4 Aの履修者は既に3 Aを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。文法事項の確認はドイツ語文章のなかで確認し、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書けること、表現することもねらいとしたい。またこうした文の構造・語順などを文法的にさらに理解を深めるようにしたい。	
	外国語（ドイツ語） 4 B	4 Bの履修者は既に3 Bを履修済みであることがのぞましく、引き続きさらにドイツ語中級へとステップアップを図る。テキストは講読中心であり、さまざまな読み物が教材となりうる。さらに「話せるドイツ語」もテーマとしたい。4 Aよりはおおくの読み物に接することをねらいとしたい。また視聴覚メディアを用いて内容を理解してゆくことも試みたい。	
	外国語（フランス語） 3 A	1年次に学んだ1・2の初級の学習を基礎にして中級レベル前半の文法学習に入ります。1・2と同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（フランス語）3 B	語学＋フランス文化。1・2Bの続きです。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（フランス語）4 A	これまでの学習を基礎にして中級レベル後半の文法学習に入ります。1・2・3Aと同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をします。	
	外国語（フランス語）4 B	語学＋フランス文化。1・2・3Bの続きであり、その発展です。コンピュータ教材を用いた中級語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介します。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標です。	
	外国語（中国語）3 A	中国語2 Aで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）3 B	中国語2 Bで学んだ中国語の基礎を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、自分で応用力を養いうる基礎的能力の保証をします。基本的な文章を読み、簡単な会話ができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（中国語）4 A	中国語3 Aで学んだ中国語を復習しながら、初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができる。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験4級から3級レベルに到達できるようにする。常用語は1,000～2,000による中国語複文の日本語訳と中国語訳ができる。	
	外国語（中国語）4 B	中国語3 Bで学んだ中国語を復習しながら、中国語初級から中級の段階における中国語文法・語彙を学ぶ。当該授業を学び終えた時には、比較的長い文章読解ができ、簡単な中国語会話を話すことができることを目標とする。授業計画としては、3回の授業でテキストを一課進み、まとめと小テストを行い、期末には期末試験も行う。当該授業においては、学生が中国語検定試験3級レベルに到達できるようにする。	
	外国語（韓国語）3 A	1 A、1 B、2 A、2 Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語3 Aにおいては日本語話者教員を配置して文法事項の説明および練習問題等に比重を置く。既に基本的な文法事項は習得されているはずであるから、ここでは初級韓国語学習で最後に残された重要文法事項である連体形を中心に、練習を繰り返して定着を図る。もちろん、3 B担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国語（韓国語）3 B	1 A、1 B、2 A、2 Bを履修していることを前提として授業を進める。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにその教科書の上級編を進める形をとるが、韓国語3 Bにおいては韓国語話者教員を配置してある程度の会話訓練も授業に取り入れる。学習が二年目に入っている学生が基本的な対象であるので、韓国語のみならず、韓国・朝鮮文化への関心を維持させる上でも会話能力を磨くことは有益である。もちろん、3 A担当教員との密接な連携のうえに行われるのは当然である。	
	外国語（韓国語）4 A	基本的には日本語話者教員を配置して3 Aから継続して教科書を進めていくが、教科書を終わらせることを目的とはしない。一般に二次用韓国語教科書は後半に入るに従って日常会話で使われる表現を多く取り入れる傾向があるが、未だ基盤が未熟な段階で高度な会話形を教えることにはあまり意味がないので、韓国語の基礎段階として必須の文法事項習得を終えた段階で、その韓国語能力をもって読解可能な文章を辞書を使って読むことに重点を移していく。それが結局は、会話形も含めた韓国語能力全般の底上げにつながると思う。なお、基礎的な会話訓練は4 Bにおいて行うこととなる。	
	外国語（韓国語）4 B	韓国語話者教員を配置して、プリント等の教材を使用して主に会話訓練を行うが、4 Aの進捗状況を確認しつつ、使用可能な文法事項を増やしていく。その際、あまり高度な会話形を追求するのではなく、もっとも基本的な形を確実に身につけられるように指導する。往々にして、「生きた韓国語」のスローガンのもと、学生の処理能力を超えるような会話形を教えるケースがあるが、既修文法レベルがさして高度ではなく、またその定着も十分ではない状況においては逆効果である。	
	日本語3 A	この授業では既習の日本語表現を確認し、より論理的な文章を書く方法を提示する。文体によってことばの選び方や文末表現が異なるので、教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。いろいろな書きことばの文体を学んだ後、物事の前後関係、仕組み・手順・方法、因果関係、行為の理由・目的、物事間の共通点・相違点、伝聞・引用などを表す表現を取り上げ、作文の練習をするというスタイルで授業を進める。	
	日本語3 B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。後半に話しことばと似た性格を持つ電子メールの練習をして、両者の共通点と相違点を認識してもらうことを目標とする。授業は、まず話し言葉の特徴を考え、その後日本語の改まり度や敬意表現、伝言、勧誘、許可、情報の提示、依頼、申し出などの機能を担う表現を取り上げ、ロールプレイやディベートといった形でそれらの表現を含む会話練習をする。さらに、会話と電子メールの共通点と相違点を検討し、電子メール表現の特質を考える。	
	日本語4 A	この授業ではより論理的な文章を書く方法を提示する。教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることをめざす。また、自分の意見と、参考にした文章との違いを明確に書き分けられることを目標とする。自分の考えを述べ、物事の変化・推移、賛成意見・反対意見などを表す表現を取り上げ、作文の練習もする。さらに、テーマと目的やアウトラインを考え、情報を整理して、レポートにまとめるというスタイルで授業を進める。	
	日本語4 B	本講義は対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上をめざす。また、文章をもとに、プレゼンテーションをする力を身につけることも目標とする。授業ではまず、不満・言い訳、提案、感想表現といった対人関係を考えた基本的な会話表現を練習する。その後、電子メールと手紙の共通点と相違点を考える。後半ではインタビューとそのまとめ、発表の練習をし、さらに実際にインタビューによる調査とそのプレゼンテーションを行う。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級英語 1	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。1 では、それに必要な基本的な語彙、フレーズを学ぶ。	
	上級英語 2	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。2 では 1 に続いて、表現や伝達に必要な基本的な語彙、フレーズの学習をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語 1	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、という人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、 <b>「ドイツ語技能検定試験」(独検)</b> という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局 (J N T O) がおこなう <b>「通訳案内士試験」</b> にむけて指導します。	
	上級ドイツ語 2	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。テキストも担当者がその意向をうかがいます。さらにまたドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、 <b>「ドイツ語技能検定試験」(独検)</b> という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局 (J N T O) がおこなう <b>「通訳案内士試験」</b> にむけて指導します。	
	上級フランス語 1	フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD, CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語 2	既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト(新聞・書物等)を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具休相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語 1	上級中国語 1 を学習することによって、中国語検定試験 4 級～3 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語 2 へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級中国語 2	上級中国語 1 から、段階的に学習することによって、中国語検定試験 3 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」を定着させ、簡単な通訳もできることを目標とします。さらには、上級中国語 2 へと発展できるように、中国語を「話す」から自分のメッセージを「語る」へとつなぐ基礎的段階を習得します。また、中国語スピーチコンテストに積極的に挑戦するような中国語コミュニケーション能力の向上を図ります。	
	上級韓国語 1	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、語彙、文法、表現の増強を図り、実践的に表現しうる能力を養う。用言の活用の様々なタイプに習熟し、話しことばと書きことば、敬意体と非敬意体、連体形や接続形、引用形などの様々な文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充をはかり、「電話の表現」、「感謝を表す」、「許可を得る」、「提案する」、「意志を述べる」といった、より洗練された談話表現の獲得にも力を注ぎ、実践的な表現力を増強する。	
	上級韓国語 2	韓国語の基礎の学習を終えた段階で、会話力と作文力を実践的な練習を通して身につける。まず、発音の練習を徹底して繰り返す。次に、会話における「場」の重要性を認識し、いつ、どこで、誰と、何を、どのように、なぜ、言葉を用いて話すのか常に意識し、やり取りする練習を行う。また、自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験 3・4 級合格を目指し、試験対策も行う。	
	上級英語 3	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。3 では、1, 2 で学んだ表現方法を使って、様々なテーマのもとに、自己表現活動、伝達活動の実践をする。	
	上級英語 4	英語 1 及び英語 2 で養成した基礎力をもとに、国際社会で生きる日本人として必要な、実践的英語力を身につけることを目指す。そのために、4 技能のバランスの取れた学習をするが、中でも話す技能・書く技能といった発信力に重点を置き、スピーチ・プレゼンテーション等を通じて、自己を表現し他者に意思伝達する力をつける。4 では、3 に続いて、実践活動をさらに発展させる。	
	上級ドイツ語 3	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。上級ドイツ語 3 では同 1・2 の内容をさらに発展させて展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、「ドイツ語技能検定試験」(独検)という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局 (J N T O) がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	
	上級ドイツ語 4	上級ドイツ語とは何か味わいのあるドイツ語文をていねいに読んでみたい、あるいはドイツ語で表現してみたい、ドイツ人の生活文化、芸術、学術、文芸、経済・商業、スポーツ、政治・外交、教育、漫画、国際ボランティア活動、ジャーナリズムなどをのぞいてみたい、ドイツ留学をしてみたいという人に開かれたドイツ語です。上級ドイツ語 4 では同 3 の内容を受けて講義を展開します。またドイツ語の資格試験にチャレンジしたいというひと、「ドイツ語技能検定試験」(独検)という 5 級～1 級までのものとか、日本政府観光局 (J N T O) がおこなう「通訳案内士試験」にむけて指導します。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	上級フランス語 3	「上級フランス語 1」に続いて、フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるようになるために、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で用いることができるようになることを目標にして、DVD、CD等、視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。	
	上級フランス語 4	「上級フランス語 2」に続いて、既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト（新聞・書物等）を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、受講者をその世界へ触発する。	
	上級中国語 3	上級中国語 3 を学習することによって、中国語検定試験 3 級～2 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級中国語 4	上級中国語 3 から、段階的に上級中国語 4 を学習することによって、中国語検定試験 2 級の習得を目指します。そのために、中国語を「書く」と「話す」ということから、さらに進んで、自分の伝えたいメッセージを「語る」ということへつないでいきます。主として、中国の新聞や映画なども「見て、聞いて」自然に分かるようにします。さらには、中国語スピーチコンテストや中国語ビジネス資格試験へ積極的に挑戦できる中国語コミュニケーション能力の習得を目標とします。	
	上級韓国語 3	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語表現力を養うことを学習目標とする。日本語と韓国語の対照言語学的な観点も考慮にいれ、両言語の類似点と相違点に気付き、さらに直訳では不自然な、高度な表現の習得にも力を注ぐ。また、韓国で出版された小説、童話、詩集、新聞記事等を教材とし、豊かな表現の学習とともに、そこに反映されている韓国文化や価値観、考え方等を知り、理解することを目指す。	
	上級韓国語 4	韓国語の中級を学んだ学生を対象とする。より豊かで自然な韓国語でのコミュニケーション能力を養うことを学習目標とする。まず、聞き取りや会話練習に重点を置き、映画やドラマ等を題材にし、さまざまな表現を学び、応用できる練習を行う。また、日記や感想文を課題にし、自分の考えや主張等を効果的に伝えるための文章力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験 2・準 2 級合格を目指し、試験対策も行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本事情 1	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要なと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では日本の風土、芸術文化、娯楽、家族・人生観、大学生生活、衣食住文化等をテーマとして取り上げる。	
	日本事情 2	原則として留学生を対象とした科目である。日本文化や大学生生活に必要なと想定される一般的な事象について提示し、受講者の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では労働・産業構造、技術革新、教育、交通・物流、コンビニエンス・ストアなどの業態、コミュニケーションの様々な形態等をテーマとして取り上げる。	
	外国事情 1	明治維新以後、日本の近代化に多大な影響を及ぼしたのはヨーロッパ諸国であった。講義では、ペローの童話(シンデレラ)を取り上げ、そこに描かれる家族像から、ヨーロッパ近代社会を支える「家族」の意味を考え、ヨーロッパの文化・精神性への理解を深める。具体的には、ヨーロッパの地理や歴史、伝承文学、原作者ペローの紹介、夫婦と子どもの位置関係、家族内のいじめ、母親と父親の役割、日本の昔話との関係、ヨーロッパにおける精神性の基盤、ヨーロッパの昔話における「家族」の特徴等の順序で講義を行う。	
	外国事情 2	アメリカ合衆国は、今日世界最大国であり、世界に対する影響は絶大であり、日本にとって最も親密な国であり、アメリカの知識は不透明な21世紀において日本の将来を考える際に大いに参考となる。講義では、第一に今日のアメリカを理解する上で必要な基礎知識、すなわち、日米関係、アメリカ合衆国成立の経緯(歴史)、地理、人種・民族、政治、文化(文学をも含め)等、様々な分野の基礎知識を身につけ、次にこれらの知識を利用して、現代日本をアメリカと比較して検討するという視点を養うことが目的とする。	
	日本の文学 1	最も好事家的な学問であると思われがちな文学を単なる教養ではなく、社会批評の学問として再認識する。「詩」や「物語」という概念を拡張し、社会の様々な物語の存在に気づくことが出来、かつそれらに批評的な視点を持つ方法を有する。授業では、日本近代「文学」研究の誕生、作家論・「作家」をめぐる物語、作品論・研究としての文学、テキスト論・研究から再び批評へ、実証研究の意義・文学の基礎、読者論・様々なレベルの読者、サブカルチャーとメインカルチャー、「文学史」をめぐる物語等のテーマについて講義を行う。	
	日本の文学 2	文学を読むことと文学を研究することは違う。文学は、作品を読み、時代や文壇のことを調べ、作家の意図をさぐる単なる謎解きでもない。今や文学だって単なる好事家的な営為とは違う段階に来ている。文学史の再教育としてではなく、文学を研究する方法を講義することによって、単なる文化的教養ではなく、新たな思考法の獲得の機会とすることを目指す。具体的には、文学を物語と考え、社会の多くの言説がその構造に支えられているということを知り、如何に物語に批評的な立場を取りうるかという方法の獲得を目指す。講義のテーマは、モダンとポストモダン、批評から研究へ等である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	外国の文学 1	外国文学を原著で読むことで翻訳では感じるのが難しい文化的背景や語感等を把握することを目的とする。「ハリー・ポッターと賢者の石」(シリーズ第一巻)を購読する。映画や翻訳などでストーリーになじみのある児童文学ではあるが、イギリスの子供たちにとって大前提となっている文化的事実など、異文化理解のために学ぶべきことがたくさんある。講義では原文(英語)を丁寧に読みながら、言葉の面白さにも注目し、原文の持つ響きを理解することを説明する。	
	外国の文学 2	この授業では以下のことを到達目標とする。(1)外国文学を原著で読むことに親しむ。(2)必要以上に日本語に頼らずに英文を理解する。(3)文学作品の社会的・文化的背景を理解する。(4)言葉の面白さを楽しむ。講義では、ロアルド・ダールの「チャーリーとチョコレート工場」を、次には同じくダールの短編小説を講読します。ダールの優れた人間観察力から描き出される筆致には引き込まれるものがある。講義では原文(英語)を丁寧に読みながら、言葉の面白さやイギリスの文化を理解する上で欠かせない知識などを学ぶことを説明する。	
	文化人類学 1	異文化理解の学問として始まった文化人類学の概要を学説史をたどることによって理解する。文化人類学の特徴は西欧にとって異質な社会を対象とした研究だけではなく、人間の全活動を文化として総体的に理解しようとしたことにある。そのような文化人類学の考え方を、啓蒙期から進歩主義の人類学、機能主義人類学、構造主義人類学、象徴主義人類学、解釈人類学とたどっていくことで明らかにする。現代の社会における文化人類学の果たすべき役割も重要なテーマである。	
	文化人類学 2	文化人類学 1 で学んだ基本的な考え方をふまえて、文化人類学が扱う個別のテーマについて共に考えてみる。扱われる問題は、家族と親族、結婚、ジェンダー、宗教、ナショナリズム、グローバリズムなど多岐にわたるが、そのうちのいくつかが選ばれ解説され、学生自身の問題として討論されることになるだろう。身近な問題を通して世界をどう捉えることができるかを学生に認識させることが目標となる。自身が社会や世界とどのようにつながっているかを考えることにより、自身への理解が深まることを期待している。	
	人文科学論 1	人文科学とは、辞書的には「人類の文化についての諸学問」と規定される。ここでの「文化」は、一般的に理解されている芸術文化という意味だけではなく、人類の生活様式・思考様式全般にまで及ぶ。この講義では、人類の諸文化を明らかにする切り口を設定し、人類の文化について多角的な面から考察し、いわゆる「現代社会」そのものを相対化できる、柔軟な思考力を身につけることを目指す。	
	人文科学論 2	日本だけでなく、世界的に見ても上演頻度の高いシェイクスピアの戯曲は、単にイギリスの文学・演劇であるにとどまらず、全世界で数世紀にわたり受容され、演劇のみならず、オペラ、バレエ、映画でも、シェイクスピア戯曲は表現されてきた。ドイツ、ロシアでも、シェイクスピアは数世紀にわたり、ほとんど自国の作品として受容されており、また日本では歌舞伎、能狂言の形でも改作されている。いまや世界文化ともいえるシェイクスピア文化を、英文学の枠外から見直し、日本を始めとして各国の(演劇)文化にシェイクスピアがどのような衝撃を与えたかを観ていきたい。	
	日本史 1	最近の日本史研究の進展により、日本史を日本列島だけで考えることではすまなくなってきた。日本列島とユーラシア大陸、その他の諸地域との国際関係・国際交流が重視されているのである。中学校・高等学校の日本史教科書もそのような視点で書かれるようになってきた。本講義ではアジアからみる日本史として、前近代社会を中心に、古代の大陸との外交、中世の国際関係、鎖国下での国際関係等をテーマとし、日本とそれを取り巻く国際社会について歴史的に考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本史 2	日本史 1 をうける形で、明治期以降の日本の対東アジア外交史を扱う。まず、伝統的な東アジア朝貢貿易システムを西洋型の万国公法体制に転換させようとする明治政府の基本的な外交方針を確認し、その具体的発現形態としての対朝鮮、対中国外交を概観する。それを通して、近代日本が帝国主義時代を帝国主義国として生き抜くことを決断した時点で不可避的に東アジアへの抑圧を伴わざるをえなかったことを示し、未来の対東アジア関係について考えさせる契機とする。	
	西洋の歴史と文化 1	＜キリスト教を通して知るヨーロッパ史 1＞キリスト教の発展と密接な関係を持っているヨーロッパの歴史をよく理解する為にはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずイエス・キリストが生まれた時代のユダヤの状況を理解するためにメソポタミア時代からユダヤ王国建国、ローマ帝国による支配にいたるユダヤ民族の歴史とユダヤ教を概説し、その上で、イエス誕生の経緯と新約聖書に見られるイエスの言動を通しキリスト教の基礎的教義と古代キリスト教会の歴史を概説する。	
	西洋の歴史と文化 2	＜キリスト教を通して知るヨーロッパ史 2＞ヨーロッパの歴史はキリスト教の発展と密接な関係を持っているので、ヨーロッパをよく理解する為にはキリスト教の知識が必要である。講義では、まずキリスト教の基礎的知識を明らかにし、中世ヨーロッパ社会にキリスト教がどのように浸透したか、また、ローマ・カトリック教会がいかなる社会的勢力となったか等の問題を検討し、中世ヨーロッパ社会の特質を概説する。次に近代初頭のマルティン・ルターの新教改革の原因と社会に対するその影響を概説する。	
	中国の歴史と文化 1	＜漢字の変遷と中国の歴史＞東アジア社会では、民族と国家がそれぞれであるが、その共通性を追求すれば、漢字はその一つである。講義では、東アジアにおける共通した漢字を軸に、その歴史をさかのぼって、文化理解を深めることを目指すが、まず漢字の起源を甲骨文字まで遡り、次に史上の「六書」における漢字の変遷、秦始皇帝による漢字統一や書体の変化を、また墨や紙等、漢字の書写道具と材料の変化を明らかにし、漢字の発展が中国の歴史と文化にどのような影響を与えたかを考察する。	
	中国の歴史と文化 2	＜漢字の変遷と中国文化・日本文化＞東アジア社会の共通性を追求すれば、漢字はその一つである。横文字の世界に対して、こうした共通の漢字文化は東アジアを繋ぐ一つの絆になった。東洋史の一側面として、その漢字の今昔及び各地域での様相を考察することは、まさに近年以来大いに騒がれる東アジア共同体構築の基盤を理解することとなる。講義では、西夏文字等漢字の派生文字の歴史、さらには日本字における漢字の由来等を検討することによって、中国文化と日本文化等の関連性を明らかにする。	
	考古学 1	考古学という学問の概説をおこない、学問の基礎的な考え方を学ぶ。先史人類の生活と文化の変遷を学ぶことによって人類と文化の発達の意味、人類と環境の関係について考える。これによって自己存在の位置づけを認識する一助とし、また過去を糧として現在と未来の生活指針を設計する態度が身につけられるであろう。講義と共に、遺跡や遺物も視覚的に捉えていく。学生にはその背後にある人間についていかに考えるかが課題として与えられるであろう。	
	考古学 2	考古学 1 を踏まえて考古学がどのように人間の歴史を理解しているかについて考える。考古学は先史文化の学問であるばかりではなく、無文字社会の歴史を理解する上でも欠かせない。幾つかの無文字社会を扱い、文化の発達と衰退について学ぶことによって、人類と環境との関係、現代と未来の人間社会について考察することを目標とする。過去を現在の自分自身に投影することによって、将来の生活指針を設計することができることを学ぶことが出来るであろう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	日本の芸能 1	日本には様々な芸能が存在している。民間でおこなわれてきた様々な芸能は現在でも年中行事などと深く結びついておこなわれてきている。近世になると民間の芸能が民衆を対象とする職として成立してきた。その一つが落語である。この講義では「上方落語」に焦点を当ててみる。落語の言葉は、生きた古語とも言うべきもので、落語に親しむことによって他の日本の伝統芸能、人形浄瑠璃文楽や歌舞伎などへの関心も生まれていく。広い視点から落語を日本の伝統文化の中に位置づけたい。	
	日本の芸能 2	日本が世界に誇る伝統芸能の一つとして人形浄瑠璃文楽がある。歌舞伎などとも関係が深いこの人形浄瑠璃文楽の歴史、特徴について知ることによってまた歌舞伎などの伝統芸能への関心も生まれてくるだろう。講義では概説の後に、具体的な例として作品を取り上げる。台本の購読・解説をおこなうので古文に慣れ親しむきっかけにもなる。音源資料や映像資料を使って人形浄瑠璃文楽の実際のあり方についても解説をおこなう。能や狂言、歌舞伎などといった舞台芸能についても人形浄瑠璃文楽と共に考えてみたい。また学生が関心を持ち、伝統芸能の公演に触れるようになることが期待される。	
	日本民俗学 1	日本民俗学は近代日本の学問の中においては西欧化の輸入ではない日本独自のものとして形成されてきた点で特異である。それは何よりも近代日本におけるアイデンティティの問い直しであった。その学問形成歴史を踏まえながら、日本民俗学が関心を寄せてきた日本の生活文化について講義をおこなう。生活文化を考える際には社会（人間関係）の分析が重要であることを認識したい。沖縄文化の解説をおこないながら学生には自分たちの周囲の生活文化を考えていくきっかけを与えたい。	
	日本民俗学 2	柳田國男によって創始された日本民俗学は、何よりも現実を直視することにあつた。身の回りの常識を疑い、その意味を探ることにその本質はあつたともいえる。そのような日本民俗学の成果を踏まえながら、我々の生活文化の再検討をおこなうことを目標とする。親子関係、婚姻関係、ジェンダーとセクシュアリティ、若い、生活革命、年中行事の変化、伝統文化の作られ方などが問題となるであろう。近年の日本民俗学の新しい展開を踏まえながら、これらの問題について概説をおこなう。学生は感心に合わせて身の回りの生活文化に関するレポートを作成する。	
	自然科学史	「顕微鏡」といえば、肉眼ではみにくいものを拡大して観察することができる道具として、ほとんどの方がプラスのイメージを持つであろう。しかし、17世紀におけるその普及が、実は発生学の分野においては後退を招くものであつたという事実は広く知られていない。本講義では、博物誌と生命論、不老不死思想と錬金術の関係、原子論と分子論、周期表の誕生、分類学と進化論、自然発生説等を題材に、科学の光と影、失敗と成功の「おもしろさ」を味わいながら、科学とは何かを改めてとらえ直してほしい。	
	図像学	美術作品といわれるものの中でも、文化や宗教の違う国の作品や、日本でも古い時代の作品には、予備知識なしに見ただけでは理解できないものもある。そこでこの授業では、西洋・東洋の宗教絵画・物語絵画の意味を、ギリシャ神話・聖書・仏伝・日本の伝説や物語などを通じて学ぶ。その姿や場面の意味するものや、物語の内容を知ることによって、個々の絵画を理解するのみならず、各国の物語や神話を比較しつつ鑑賞することにより、多様な文化への興味を深めることも期待される。	
	人文科学論 3	日本文化論・日本人論というのは、ブームになっている。その論点は、日本文化や日本人の独自性・特殊性を論ずるものが多いようである。しかし文化は、相互交流の中から生まれ、そこには独自性とともなう普遍性も存在するといえる。この講義では、いわゆる「日本文化」を対象にして、文化の持つ特殊性と普遍性の問題について考える。具体的には、福沢諭吉・柳田國男等、「日本文化」に関わるいくつかの言説について紹介しながら検討する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	人文科学論 4	日本の列島社会やそれをとりまく地域の中にはさまざまな文化圏が存在している。いわゆる日本文化は、そのような文化との影響を受け、さらには相互交流・受容の中から生み出されたものということができる。本講義では、列島をとりまく文化圏と日本文化との関わりについて、具体的な事例から考えたい。縄文文化と弥生文化、山の文化と海の文化、琉球文化とアイヌ文化、中国・朝鮮文化と日本文化、ヨーロッパ文化と日本文化等をテーマにして学ぶ。	
	日本史 3	高校まで学んだ知識を再確認しながら、19世紀後半、すなわち幕末維新期以降の日本が歩んだ歴史を概観していく。特に、欧米諸国なみの近代国家建設を目指した日本が、いかなる葛藤や矛盾をみせながら、新たな社会を形成していったのか、政治経済面、対外問題、戦争を中心にいくつかの事例をとりあげて講義する。そのうえで、高校までに学んだ歴史の知識と、実際に語られる歴史の差異をいかに把握すべきか、受講者とともに考えてみたい。	
	日本史 4	高校までの日本史は、政治面を中心にしながら主に国家の歩みを教える内容といえる。その一方で歴史を形作るのは、いつの時代であろうと、人やモノの移動・交流がおりなした所産にほかならない。そうした、高校までは詳しく教えられることのなかった歴史のうち、世界規模での移動・交流が盛んになった近代の日本を舞台としながら講義していく。また、近代的価値観を求められた激変の時代のなかで、人びとはいかなる価値観をいっていたのか、モノの交流がいかに社会を変貌させていったのかについても注目して講義してみたい。	
	社会の仕組みと人間の営み 1	この科目では社会学的なものの見方や考え方を学んでいくことを第1の目的とする。日常生活において当たり前すぎて気にもとめない、私たち自身の行為や他の人々との関係のあり方、あるいは、私たちを取り巻く様々な社会の制度について取り上げ、それらがどのような意味をもつのかを考える。具体的には、社会学とはどんな学問か、私と社会、アイデンティティ、国民であること、エスニシティ、エスニック・スクール、関係を築く、地域社会とエスニシティを取り上げる。	
	社会の仕組みと人間の営み 2	社会学的なものの見方や考え方を身につけながら、私たちを取り巻く社会がどのような仕組みをもち、そのなかで私たちがどのように生きているのかを考える機会としたい。本科目では、具体的に次の内容になる。はじめに、社会制度のなかにおける教育と学校について考察し、その中で外国人児童生徒問題を取り上げる。さらに、集りのなかにおける個人と集団というテーマについて考え、現代社会全般について考察を発展させる。	
	法学 1	本科目は法学を専門としない学生を対象として、法の基本的な知識を習得させることを目標とする。それゆえ最初に我々の通常の生活に存在する法を指摘し、社会における法の役割を考え理解する。その次に、法と他の社会規範との比較、法の効力の範囲、法の分類、法的関係としての権利と義務、法の適用と解釈等の課題を通じて法を多角的視点から学んでいく。	
	法学 2 (日本国憲法)	本科目は法学を専門としない学生に、最高法規である日本国憲法の基本原理を理解させることを目標とする。最初に憲法を理解するために憲法の内容、近代憲法の原則等の基本を論じる。次に日本国憲法の原理を明らかにし、平和主義の理念、統治組織としての国会、内閣、裁判所の各々の性格と権能、人権保障の意義と種類等を学んでいく。尚、法学2に入る前に、法学1の知識を習得しておくことが望ましい。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	現代政治を読み解く1	<p>若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。</p> <p>「現代政治を読み解く1」では、そのような観点から、憲法9条の問題や日本の国際貢献、自衛隊のPKO参加など、重要な政治的テーマを取り上げ、その背景にさかのぼって詳しく解説を行う。</p>	
	現代政治を読み解く2	<p>若者の政治離れが指摘される一方で、インターネットでは無責任で過激な政治的主張が若者の間で展開されている実状がある。受講生が政治上の重要テーマを学習し、偏った見方に陥ることなく、自分なりの政治に対する意見と市民としての自覚を持つようにすることが、本講座の目的である。</p> <p>「現代政治を読み解く2」では、今日の政治状況を考えたときに、欠かすことができないと考えられるテロリズムの問題、そして日本の安全保障の問題を特に取り上げ、詳しく解説を行う。</p>	
	社会科学論1	<p>社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。</p> <p>「社会科学論1」では国家の役割や民主主義の歴史と概念、アメリカやイギリスの政治制度、さらにはエネルギー問題などを取り上げる。</p>	
	社会科学論2	<p>社会科学は政治学、経済学、法学、社会学など、多様な分野から構成される学問である。講義では、政治、経済、憲法・法律、社会にかかわる様々な問題を扱うことで、受講生が社会科学に対する全体的イメージをつかめるように心がける。</p> <p>「社会科学論2」では、各国の選挙制度、日本国憲法、人権問題、地球環境問題などを扱う。現代社会が直面する様々な問題への関心を深め、学生が自分なりの見方や考察ができるようになるのが、本講座の重要な目的である。</p>	
	国際関係論1	<p>世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。</p> <p>「国際関係論1」では、まず基礎固めの意味で、国際社会の生成と仕組みを詳しく学習し、その後、国際連盟、国際連合、その他国際機関の活動、国連平和維持活動(PKO)、日本の政府開発援助(ODA)などの重要事項について扱うことになる。</p> <p>また必要に応じて、最新の世界情勢に関する解説も行う。</p>	
	国際関係論2	<p>世界は日々刻々、ダイナミックに動いている。重要なことは学生の国際的視野を養い、外の世界の動きへの関心を高めることである。</p> <p>「国際関係論2」では、戦後の国際社会の歴史を取り扱う。すなわち冷戦の開始から終結にかけての流れを詳しく学習し、さらに冷戦後の混沌とした世界情勢についての解説を行う。国際社会がこれまで歩んできた歴史をきちんと学習してこそ、今日の世界情勢への理解も深まると考えられる。</p>	
	21世紀経済への視点1	<p>21世紀を迎えた今日、日本はずいぶん豊かになったはずだが、暮らし向きはむしろ厳しくなってきた。なぜなのだろうか。経済格差や人口の減少も問題になっている。われわれの暮らしはこれからどうなっていくのだろうか。経済学の基礎知識を利用しながらこんな疑問に答えていく。具体的には、マクロ経済主体の結びつきと国民所得、家計、企業、政府、外国、グローバル化の波、国民所得、金融・財政政策、マーケットにおける価格の決定、消費者の合理的行動、生産者の合理的行動、市場メカニズム、競争の利益と不利益を取り上げる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	21世紀経済への視点2	<p>本科目の目標は、日本経済の流れを考えつつ、身近な経済現象などについて知り、そして、本当の暮らしの豊かさ貧しさについて考えることである。具体的には、経済と経済観の変遷、高度経済成長、豊かな社会、モノの豊かさよりも心の豊かさを、国債の大量発行問題、自由化への動き、規制緩和と構造改革、失われた10（15）年、少子高齢社会の恐怖、産業資本主義からポスト産業資本主義へ、家庭を取り巻く経済環境の変化、円高・円安の不思議（円高で得する人と困る人）、消費と貯蓄（ミクロの考え方とマクロの考え方）を取り上げる。</p>	
	グローバル時代の経営1	<p>企業経営活動は生産活動である。それは利潤の生産と財やサービスといった商品を生産する。その生産過程では、生活の糧を提供したり、人々の「豊かさの創造」機会を生み出したりもする。企業が存続するためには、利潤達成と同時に、社会的責任の遂行がなされなければならない。具体的には、経営学とは何か、企業の基本的な特質、企業形態、株式会社制度の特質、企業集団、コーポレート・ガバナンス、企業経営とステークホルダー、中小企業論、非営利組織論等を取り扱う。</p>	
	グローバル時代の経営2	<p>経営学を幅広く理解することと現実の企業経営における諸問題を整理し、考察するための方法論を学ぶ。本講義では、こうした観点に立って企業経営を考えるとともに、グローバル時代における経営戦略という視点を導入する。具体的には、経営学史を学ぶ、科学的管理法、科学的管理法の深化、管理過程論と管理原則論、人間関係論、現代組織論の源流、環境適応理論、経営戦略論、人的資源管理論、日本的経営論、国際経営、環境経営、CSRと企業倫理という個別テーマを取り上げ、話題を展開する。</p>	
	情報社会文化論1	<p>文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。とくに本科目では、情報の意味について理解することからはじめ、量として測れることを知る。ひるがえって、遺伝子情報、人間の記憶能力、文明の発祥と文字の発明、粘土板・パピルス・紙といった記録媒体、社会的記憶装置である図書館などについて、古代からギリシア時代あたりまでを概括する。歴史の発展、文化・文明の展開を「情報」という視点から見る「情報史観」を導入する。</p>	
	情報社会文化論2	<p>文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から見る。紙の発明は人類に何をもたらしたか、同様に、印刷術の普及はどうかであったか、また、レコードやフィルムといった音声・画像・映像などの情報メディアが社会や文化にどのような影響を及ぼし変革をもたらしたのかについて学ぶ。さらに、数表、計算する道具、電子計算機など、情報社会を形作ってきた事物・事象の生成・展開について、原動力となった要因を社会的・歴史的・文化的背景を踏まえて概説する。</p>	
	生涯学習論1	<p>生涯学習時代といわれて久しいが、この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、生涯学習・生涯教育論の展開と学習の実際、生涯学習社会における家庭教育・学校教育・社会教育の役割と連携、生涯学習振興施策の立案と推進、教育の原理とわが国における社会教育の意義・発展・特質等を取り上げる。</p>	
	生涯学習論2	<p>この科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、社会教育行政の意義・役割と一般行政との連携、自治体の行財政制度と教育関連法規、社会教育の内容・方法・形態（学習情報の提供と学習相談、評価を含む）、学習への支援と学習成果の評価と活用、社会教育施設・生涯学習関連施設の管理・運営と連携、社会教育指導者の役割を取り上げる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	図書館の基礎と展望	図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を解説する。具体的には、図書館の現状と動向、図書館の構成要素と機能、図書館の社会的意義、知的自由と図書館、図書館略史、公立図書館の成立と展開、館種別図書館と利用者のニーズ、図書館職員の役割と資格、図書館の類縁機関・関係団体、図書館の課題と展望などを取り上げる。	
	社会に生きる私たちの人権	「人権」という言葉を辞書で引くと「人間が、人間として当然に持っているといわれる権利。基本的人権。」とある。この権利は、わが国では日本国憲法によってすべての国民に保障されているのだが、果たしてどうであろうか。わが国の歴史のなかには、多くの差別の事例が見られる。また、世界を見渡せば、国や地域によって、必ずしも完全な形で人権が守られているとばかりは言えない状況がある。人権や差別にかかわる思想的・歴史的な経緯を確認しながら、人種・性・障害者などの差別問題、学校・職場におけるハラスメントについて考えていく。	
	女性の生き方	一般に女性論・女性学は、社会的存在としての女性について、その自立などを論じる。だがそれは、自然的存在としての女性を忘れることであってはならないだろう。むしろ社会的存在としての女性を論ずるためにこそ、社会的及び自然的存在を包括する「自然（ジネン）的存在」としての女性が見られねばならぬ。したがって、女性の生き方と言っても、単に社会の中で女性はいかに生きるかのみを問題とするのではなくむしろ女性の存在を通じて謂わば新たな自然存在論を試みるというのが本講義である。	
	地図を読む	自分の進むべき道を自ら発見し、たくましく生きることの大切さを体験的学習する。「地図」と呼ばれるものには、例えば、国土地理院発行の「地図」や、哲学的な意味での人生の「地図」など、様々なものがある。講義では「地図」という言葉をキーワードに、教科書の上に依存した学習ではなく、人生を歩む上で役立つ実践的な知識も学ぶ。	
	ボランティア論	他人のために自分は何ができるかと考えたことや、他人や社会に役立ちたいと思ったことはないだろうか。社会には援助が必要な人々や無償の労働が必要な分野がたくさん存在する。そこで、ボランティアということを考えてみよう。この科目では、自分のボランティア体験を振り返り、まず、ボランティアという言葉に対する自分のイメージを検証することから始める。そして、ボランティアとは何か、その活動分野、受ける側の考えとニーズの理解、必要な態度とルール理解、歴史と基本的理念、市民参加の重要性、NPOとNGOを取り上げる。	
	情報法制論	平成17年4月に完全施行された個人情報保護法をはじめ、情報公開法・著作権法など、情報をめぐる個人・法人の権利の保護に関する法律を中心に、その制定経緯から説き起こし、理論上・実務上の要点を解説する。特に、マスメディアや企業内で活躍する際に特に留意すべき法的争点を取り上げる。具体的には、法律学における「情報」、マスコミ倫理と法制度、「知る権利」、プライバシー保護、コンプライアンス、著作権の歴史、著作権法の基本概念、パブリシティの権利、不正競争防止法・企業秘密、工業所有権法の基礎、ビジネスモデル特許を取り上げる。	
	地球惑星学1	本講義概要は地球惑星科学の基礎を学び理解することである。地球惑星学1では「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「プルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。さらに太陽系誕生のメカニズムと「46億年前の地球誕生から生命誕生」までをひも解く。講義内容は最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	地球惑星学 2	本講義概要は「46億年の地球史」を学び、「地震」と「火山」の概要と原理を学ぶ。とくに地球誕生から46億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについて理解する。講義内容は最新の研究成果を織り交ぜ解説する。	
	科学技術論 1	現代社会における科学技術の発達は目を見はる物があるが、我々はそうした中で社会生活を送らなければならないのも事実である。そこで、科学技術論 1 では例えば将来必ずや身近な物となるであろう介護用ロボットをはじめとするロボット開発の現状や衝突しない自動車の開発、さらにはリアモーターカーによる高速鉄道の簡単な原理など、それぞれのテーマに関する最先端技術について正しく理解するための知識を分かりやすく講義する。	
	科学技術論 2	科学技術論 2 では、我々が生活する上で欠かせないエネルギー問題をメインテーマに講義計画を立てており、例えば現在の社会生活において欠かせないエネルギー源である原子力エネルギーの安全性とその重要性について、また、地球外資源の開発と言う観点から国際宇宙ステーションを中心とした宇宙開発の必要性和現状について等より具体的な内容で構成する。我々は好むと好まざるとに係らず最先端科学技術の真ただ中で生活するわけで、それに対する正しい知識を持つきっかけとなればと考えている。	
	統計学 1	統計学の本質を出来る限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば単回帰分析、3つの変数の関係を知る法、正規分布、標準化、Zスコア、Tスコア、偏差値、五段階評価、統計的仮説検定、平均値の検定。	
	統計学 2	統計学の本質を出来る限り解説し、我々の日常生活の身のまわりにある具体的なデータを取り扱って講義中に取り上げる。たとえば新旧両製法を比較する法、統計的推定、等分散検定、平均値の差の検定、2つの母集団の異同を判定する法、同一人に2つの処理をした場合の結果の差の判定法、適合度検定。	
	基礎数学 1	コンピュータ技術、CD/DVDの読み取り、経済、金融、金利、統計、測量の他、Excelでの処理等、日常生活で数学に関連する事柄は多様である。基礎数学 1 では、整数、二次方程式と関数の初歩、数列、微分積分の基礎、確率と統計に関する内容を出来るだけ身近な話題と関連づけて扱うことにより、数学の基礎的素養を習得し、問題を論理的に考えられる力を養う。また、いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	
	基礎数学 2	日常生活で数学に関連する事柄は多様である。また、数学は物理学・天文学の問題を解きたいという欲求から発達したという一面も持っている。基礎数学 2 では、ピタゴラスの定理、直線、平面、円、面積、体積の計算といった幾何学を中心に日常生活と数学に関するトピックを出来るだけ身近な内容と関連づけて扱う。授業を通して、数学の基礎的素養を習得し、問題を論理的に考えられる力を養う。また、いくつかの物理や自然現象と数学の関係についても触れる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	生物学 1	本講義では「食と人間」をテーマに、我々の日常生活における様々な要素とその意義をとらえ直すことにより、「生物とは何か」「人間とは何か」「生きるとは何か」を考えることを目標とする。前半では、我々はなぜ食事をとるのか、食べたものはどこに行くのか、人間はなぜ動くのかといった講義を通して「食→からだ、行動」のプロセスを論じる。後半では、生命の起源、生物の変遷、人類の歴史と絡めながら、生態系における人類の「住と食事」を論じる。	
	生物学 2	生物の示す多くの現象は「遺伝子」に書き込まれている情報の発現調節に因る所が大である。このことを踏まえて、身近な遺伝現象の調節機構・「遺伝子」の概念・「遺伝子」の実体を理解することを目指す。併せてヒトが現生の生物の中で特別な存在ではないことを理解し、特別な存在である自分を考える基盤を作って欲しい。	
	物理学 1	人類は昔から宇宙や自然の本質に大変関心を抱き、自然現象を色々な形で日常生活に採り入れてきた。物理学 1 では身近な太陽系の中での話題を中心に講義を進める。一見複雑に見え、別々の約束事にしたがっているように見えるさまざまな自然現象が、実はいくつかの基本的な物理法則という約束事で説明出来る事を学習する。また物理学の発展の歴史をたどり、何が原因で何が結果であるか、という因果律を学ぶ事で問題解決に対する取り組み方や論理的なものの考え方を学ぶ。	
	物理学 2	銀河系とその外に広がる宇宙の姿、系外惑星の発見と地球外生命に関する話題、20世紀初頭に誕生した相対性理論の世界を紹介する。さらに、ハッブルによる宇宙膨張の発見とビッグバン理論とその観測的証拠である宇宙背景放射の発見とそこから読み解く現在の宇宙の姿を扱う。また、宇宙に存在する様々な物質が究極的にはクォーク等の基本粒子によって作られており、これらが宇宙誕生の際いかに物質が作られてきたのかについても触れる。	
	化学 1	現代に生きる者として必要な教養としての以下に示す化学の基礎を身につけることを目標とする。(1) 原子の構造について説明できる。(2) 元素の種々の性質と原子中の電子配置の関係を説明できる。(3) 化学結合の種類や特徴について、結びついている原子やイオンの性質と関連づけて説明することができる。(4) 物質を原子、分子、イオンといったものの集合体としてイメージすることができる。(5) 化学式・化学反応式の意味を理解し、正しく読み書きができる。	
	化学 2	私たちの身のまわりの生活や私たちの体に関わる化学現象、化学技術について理解し、各人が生活の中で化学とつきあうための教養を身につけることを目標とする。生活で使っている製品や私たちの体を構成している物質について、どのような化学的な意味があるのか正しく理解し、(1) 私たちがどのようにして金属を利用しているのか、化学的性質に基づいて、(2) 私たちの身のまわりの様々な有機化合物について、その性質や用途を化学的に、(3) 私たちの体をつくっている物質について理解し、説明できるようになることを目指す。	
	自然科学入門 1	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。	
	自然科学入門 2	自然科学の発展の歴史や現代の自然科学の進歩、功績や問題点の学習を通じて、自然科学という学問の全体像を理解し、科学的見方、考え方を目標とし、「自然科学」への入門についての講義をする。そのために、自然科学の発展の歴史、宇宙、物質とエネルギー、地球環境、生命などを中心に講義する。なお、自然科学入門 I で取り扱う内容を踏まえて講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	生物学 3	「遺伝子」の働きが明らかになる現象の一つが生物の形作りである。動物が示す多様な形を生み出すシステムの実体が多く遺伝子の発現調節の絡み合いであること、その鍵になる遺伝子が見つかったことを理解して欲しい。さらには、人類が生物を改変する力を手に入れようとしている今日、生物としての自分の尊さを理解し、これからの充実した人生を紡ぐための礎として欲しい。	
	生物学 4	微生物は時に細菌と呼ばれ、病気や食中毒を引き起こす悪者のイメージがある。しかし、発酵食品をはじめ医薬品、環境修復等さまざまな分野で微生物が利用されている。本講義を通して、微生物の「素晴らしさ」「おもしろさ」が伝わる事を期待する。具体的には、「味噌、醤油を考える」「清涼飲料水と微生物」「抗生物質とバイオ医薬品」「微生物でまちづくり」のように、我々の生活、産業、医療・福祉、環境などにおける微生物とその利用例を紹介する。また、組換えDNA技術等の倫理的問題、循環型社会の構築等の資源・環境問題に関して議論する。	
	人類と環境	現代社会において環境問題は避けて通ることの出来ないもの一つとなっている。本講義では一般的に語られる環境問題とは異なり、環境とは何か、人類と環境との関わりとは何かを問い直すことによって環境問題への関心を高めることを目的とする。私たちが暮らす地球環境そのものの理解、生物は如何にして多様な地球環境に適応し多様な地球環境を形成しているかについての理解、人類の様々な環境への適応のやり方、人類社会における環境利用の方法、人類の歴史と環境との関わりを理解などについて授業を行う。	
	特別講義 1	「特別講義1」は、公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩が実施する単位互換制度のうち、2単位のネットワーク多摩加盟大学提供科目又は産学連携科目を履修した学生に対して、その単位を認定するための科目である。 本講義は、新聞社との提携講座（産学連携科目）であり、政治・経済・社会に関する具体的な記事を取り上げて解説し、記事の背景などを読み解く力を養う。	
	特別講義 2	「特別講義2」は、公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩が実施する単位互換制度のうち、1単位のネットワーク多摩加盟大学提供科目又は産学連携科目を履修した学生に対して、その単位を認定するための科目である。	
	特別講義 3	「特別講義3」は、公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩が実施する単位互換制度のうち、2単位のネットワーク多摩加盟大学提供科目又は産学連携科目を履修した学生に対して、その単位を認定するための科目である。	
	特別講義 4	「特別講義4」は、公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩が実施する単位互換制度のうち、1単位のネットワーク多摩加盟大学提供科目又は産学連携科目を履修した学生に対して、その単位を認定するための科目である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通社会的・職業的自立促進科目	自立と体験 3	本授業では、社会人基礎力を身につけることを目的とする。社会人基礎力は、専門知識を活かして社会で活躍できる人になるために必要な力である。本授業の中では、チームでの演習を重ねながら、社会人基礎力を体験的に学ぶ。自分の意見を伝え、チームで話し合いながら、様々な問題解決を体験することにより、問題解決能力・コミュニケーション力を身につけることを目指す。	
	自立と体験 4	本授業では、就職力を身につけることを目的とする。就職力とは、これからの就職活動の前提となる意識とスキルである。本授業の中では、「自分」「社会」「仕事」という3つの観点で視野を広げ、チーム活動を通して深く考えることを学んでいく。また、自分を表現し、グループで話し合う体験を重ねながら、コミュニケーションを高めていく。ステップを踏んで一つずつ学びながら、自身のキャリアを自らつくる力を身につけることを目指す。	
	ボランティア実践 1	ボランティア活動とは、自主性、無償性、公共性の3原則に加えて、創造性（開拓性・先駆性）が求められる実践活動である。2年前期に行う実際のボランティア活動を通じて、社会に対して自分が出来ることを模索し、自分自身が新たに取るべき行動の目標を設定する力を身につけさせ、自己実現に向けた貴重な社会的経験となることを目指す。	
	ボランティア実践 2	ボランティア実践1と同様に、2年後期に行う実際のボランティア活動を通じて、社会に対して自分が出来ることを模索し、自分自身が新たに取るべき行動の目標を設定する力を身につけさせ、自己実現に向けた貴重な社会的経験となることを目指す。	
	キャリアデザイン 1	本授業では、卒業後に社会人として活躍するための意識の醸成を目的とする。本授業の中で、キャリアデザインの理論学習に基づきキャリアに関する考え方を習得し、個人ワーク、グループワーク等を通して勤労観、職業観を育成する。 本授業を通して、学生がキャリアに関する考察を深化させ、他者に説明できるようになることを目指す。	
	キャリアデザイン 2	本授業では、社会で直面する問題についてのケースワークを行い、社会に出て働く上での基本的知識の習得、現実的態度を身につけることを目的とする。授業は、現在の社会問題（労働問題等）について、チームワークを行い、必要に応じてゲストスピーカーを招聘する。 本授業を通して、職業労働に関する基本的知識を習得し、社会問題に対する当事者意識、現実的態度を身につけることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要			
（心理学部 心理学科）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 基礎 科目	自立と体験2	1年生を対象として、大学での心理学の学びの概要を理解させ、心理学の各専門領域への導入を行うための講義科目である。専門領域の導入部を解説し、学生にはその内容を要約する小レポートの作成を課す。最終的には、上級生の専門演習や卒業研究の成果報告会に参加し、そこでの体験を学生各自の4年間の学びの展望と関係付けたレポートを作成させることで、「心理学を学ぶ大学生としての自立」を促す。	
	心理学概論A	心理学概論Bと対を成す構成となっており、心理学の入門コースとして、心理学の全体像を示す。具体的な分野として知覚心理学、学習心理学、発達心理学、比較心理学、心理学史を扱う。これらを通して、心理学は「心」への「理学（科学）」的アプローチに基づく学問であること、そして基礎・臨床・応用とが一体となった学問であることを学習させる。	
	心理学概論B	心理学の専門分野は広範囲に及んでいる。学年が進級し、各自が心理学の個々の領域について深く学び、研究を進めるにあたっては、まずは、心理学全般に関する基本的な知識を身につけておく必要がある。本講義では、心理学の主要な領域のうち、認知心理学、教育心理学、性格心理学、社会心理学、神経心理学を取り上げ、各領域の代表的な研究成果やそれに基づく理論を紹介する。本講義を通して、学生が心理学の基礎知識を習得し、その全体像を把握することを授業の目的とする。	
	心理統計法1	心理学の研究内容を正確に理解するためには統計学の理解が必須であり、本授業は大学で学ぶすべての心理学の基礎になる。心理統計法1では、主として「記述統計」について学ぶ。記述統計とは、複雑な現象を、分かりやすい形で、まとめ、提示するための考え方や技術である。さらに、後期に開講する心理統計法2につながるように、標本と母集団の関係についても解説する。本授業では、30人以下の少人数クラスで、練習問題を解いたり、小テストを行うことによって、学生一人ひとりが確実な理解を遂げることを目指している。	
	心理統計法2	本授業では「心理統計法1」（記述統計）の内容の理解を前提に「推測統計」について学ぶ。推測統計とは、実験や調査に参加した人々（標本）から得られた結果が、より大きな一般的集団（母集団）にも適用されるかどうかを推定するための考え方や技術であり、t検定、分散分析など具体的な統計的検定の方法も学習する。本授業も、大学で学ぶすべての心理学の基礎になる。30人以下の少人数クラスで、練習問題を解いたり、小テストを行うことによって、学生一人ひとりが確実な理解を遂げることを目指している。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 基 礎 科 目	心理学研究法	<p>(概要) 心理学研究法とは、心理学の研究を科学的・実証的に遂行する方法の総称である。実証的な卒業研究を独力で実施するために必要な基礎知識として、科学的な心理学の研究方法を修得させる。 (オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 境 敦史/8回) 科学的研究を支える理念と科学の限界、科学的方法論の基礎としての実験計画法、研究を進める上で遵守すべき倫理的規範について述べる。その上で、心理学研究法のうち、心理学実験の方法論と適用例および実施上の留意点について述べる。</p> <p>(2 石井雄吉/2回) 心理学研究法のうち、検査法(知能検査、性格検査など)の方法論と適用例および実施上の留意点について述べる。</p> <p>(3 岡林秀樹/2回) 心理学研究法のうち、調査法の方法論と適用例および実施上の留意点について述べる。</p> <p>(7 福田憲明/2回) 心理学研究法のうち、面接法の方法論と適用例および実施上の留意点について述べる。</p> <p>(9 竹内康二/1回) 心理学研究法のうち、事例研究の方法論と適用例および実施上の留意点について述べる。</p>	オムニバス方式
	心理学実験法	<p>実証的な卒業研究を独力で実施するために必要な知識として、心理学研究法の根幹を成す心理学実験の理論的・歴史的・方法論的背景を修得させる。心理学実験を含めたあらゆる科学的探究が、条件間比較法・群間比較法(統制群法を含む)・単一実験参加者法などの実験計画法に基づいており、実験以外の研究法を用いても研究上不可欠の論理であること、さらに、実験計画法は統計的分析の論理とも不可分であることを学ばせる。この科目で教える理論的な事項と対応づけて、「心理学実験法実習」では、実験によるデータ収集から始まる論文作成過程を実地に体験させる。</p>	
	心理学実験法実習	<p>「心理学実験法」の講義と呼応・連動する実習である。学生を10数名ずつのグループに分け、個別の実験6種類を全て体験させる。個別実験には、質的・記述的データの取得と処理、精神物理学的測定、カテゴリー判断、動物実験、社会的判断、自由再生法などの研究手法を含む。「実験を実施し、データを収集・整理し、統計的手法を用いて分析して、実験結果を導き出し、文献を引用して実験結果について理論的に考察し、論文としてまとめる」という過程を自ら実践する経験を通じて、実証的な卒業研究を独力で完成させる力を養成する。</p>	
	心理学検査法	<p>本講義では、まず心理検査の信頼性、妥当性、目的、倫理的配慮、所見作成上の留意点など心理学検査法の基礎について学ぶ。 そして、心理学検査法実習で扱うパーソナリティ、メンタルヘルス、知能、適性、神経心理学の5領域の心理検査についてその理論や目的を学ぶ。 パーソナリティに関しては特性論の主要5因子性格検査、類型論のエゴグラム、描画法の風景構成法・樹木画テスト、投映法のP-Fスタディ、作業法の内田クレペリン精神検査、メンタルヘルスに関しては質問紙法のGHQ・MMPI、投映法のロールシャッハ・テスト、知能に関してはWISC-III・WAIS-III、適性に関しては一般職業適性検査、神経心理学に関してはBGT・コース立方体検査について学習する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	基礎科目 心理学検査法実習	本実習では、パーソナリティ、適正、神経心理学の3領域から、利用頻度の高い心理検査について、施行にあたって留意すべき倫理的配慮、施行方法、集計、所見作成の基礎を少人数クラスにおいて体験的に学ぶ。 パーソナリティに関してはエゴグラム、描画法の樹木画テスト、投映法のP-Fスタディ、作業法の内田クレペリン精神検査、適性に関しては一般職業適性検査、神経心理学に関してはBender Gestalt Testについて体験的に学習する。	
	基幹科目 比較心理学	比較心理学は、動物の行動を通して、ヒトの行動を理解する学問である。本講義では、心理学の研究対象に動物をも含まれることを学び、心理学の基礎的な知識を身につける上で、動物を研究対象とする意義や、心理学の研究法としての動物実験について学ぶ。また、研究対象が動物の行動という点で共通している動物行動学が比較心理学に与えた影響についても紹介する。その上で、心理学の各分野で行われてきた様々な動物研究の知見と、ヒトの行動とを比較することで、ヒトの行動の理解を深めることを目指す。	
	産業心理学	人々の生産と消費に直接関係した状況下において、人の行動を説明し、また予測するための様々な知見に関する概略的講義を行う。労働の場面における集団すなわち組織の機能と特徴、さらには組織を円滑に機能させるリーダーシップに関する諸理論と、業務遂行に不可欠なモチベーションの維持方法に関する諸理論を紹介し、互いに比較する。また産業の現場におけるメンタルヘルスの維持・管理およびストレスに関する基本的な知見を理解させる。さらに、今日の大衆消費社会に特徴的な宣伝・広告の方法と効果についての様々な実験研究の知見を紹介する。	
	児童心理学	乳幼児期から児童期にかけての発達とそれに伴う経験・学習は、しばしば後の人生全体を左右するほどの影響力を持つ重要事項である。本講義では、乳幼児期における心身の初期発達の様相を概観した後、児童期の子どもたちの心理を発達心理学の観点から解説する。身体・運動・言語・認知・愛着等の各発達の道筋を紐解くことにより、子どもが学校や社会に適応していく過程を理解し、それに関連する親子関係や友人関係、教育や教師の役割について、考えを深めることを目的とする。	
	障害児（者）心理学	障害の意義を知り、障害を通じて人間の行動特性や心理的適応についてより深く知ることが本講義の目的である。講義では、様々な障害の特性（短所と長所）を明らかにすると同時に、障害がある人の育児・教育・支援の方法について解説する。特に、環境と個人の相互作用の中で起こる社会的障壁を解消するための合理的配慮のあり方について事例を基に説明する。知的障害と精神障害（発達障害を含む）を中心に、乳幼児から成人までの様々なライフステージで起こる課題や、障害のある当事者だけでなく、その家族や仲間が抱える問題も検討する。	
	基礎臨床心理学	本講義は、心理検査の体験、臨床心理学の基礎理論、そして、臨床心理学が扱う問題の3つの分野について行う。特に、臨床心理学が扱う問題については、教授者自らの体験を交えながら解説し、実学としての臨床心理学を幅広く学習する。 基礎理論については、臨床心理学にいろいろな意味で大きな影響をもつ2つの理論（精神分析・分析心理学）について理解する。次に、臨床心理学がどのような問題を扱うのかについて、教授者自らが体験した事例などを引用しながら授業を進め、知識としてだけでなく、心理臨床の現場を理解することも目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 基幹科目	性格心理学	本講義では、まず、性格検査を行い、性格というものがどのように形あるものとして理解されるのかを体験的に学ぶ。次に、特性論と類型論という2つの性格理論について理解する。 特性論については、オルポート、キャッテルの理論、類型論についてクレッチマー、シュルドン、ユングの理論を学ぶ。さらに、アイゼンクの性格論から特性論と類型論との関係を理解する。	
	知覚心理学	知覚現象の観察と記述を通じて「知覚とはどのような事柄か」を、さらに、知覚研究の方法論を学生に理解させる。視覚の生理学的基礎や、構成主義心理学、実験現象学、ゲシュタルト心理学など、知覚研究の理論的・歴史的背景を論じつつ、視知覚の諸現象を採り上げながら、「見る」とはどのような事柄かについて、供覧実験を交えながら論じる。さらに、基礎知識として「音」に関する物理学や生理学的知見を踏まえ、音の現れ方、音の図地分凝、音脈分凝、音の非感性的完結化など、聴知覚における体制化の諸現象や、意味の聴知覚について論じる。	
	学習心理学	心理学における「学習」とは、「経験による行動の獲得・変容・維持・消失過程」である。人間行動を環境との関わり合いを通して定義し、そうした環境の経験がどのように行動を変容させるのかを扱う。具体的には、行動とその先行事象との関係から定義される①反射行動と②レスポンド行動、また行動とその後続事象との関係から定義される③オペラント行動、この3つの観点から、日常場面で見られる人間行動を分析していく。学生は本講により、「性格」や「やる気」といった内的な仮説構成体による行動の説明ではなく、環境との関わり合いという外的な関係性による行動の説明の仕方を学ぶ。	
	神経心理学	神経心理学は、脳損傷者の示す多彩な高次脳機能障害を手がかりとしながら、心と脳の関連性について検討する心理学の一領域である。授業では、はじめに脳の解剖学や検査法、代表的な脳疾患などの神経心理学の理解に欠かせない基礎的知識を確認した後に、視覚失認、失語、記憶障害、前頭葉機能障害といった種々の高次脳機能障害の特徴について解説する。神経心理学における代表的研究成果をもとに、私たちの心のはたらきとそれを支える神経過程について考える。	
	社会心理学	社会心理学の古典的トピックに関する概論的講義を行う。他者存在による行動変容をとらえる研究の例として、社会的促進、社会的手抜き、ダイナミック社会的インパクト理論などに関する実験とその結果について理解させる。また人々の相互依存関係を理解するためのトピックとして、集団のジレンマや公共財供給ゲームなどに代表される実験と、人々の協力頻度を高めるための方法に関する知見を紹介する。さらに、集団間葛藤について理解するためのトピックとして、最小条件集団実験、各種の外集団バイアス、黒い羊効果等を紹介し、これらを統合的に説明する理論的枠組みについての理解を深める。	
	青年心理学	児童期に続く発達段階を青年期と捉え、この時期における人間の意識と行動を学ぶ。青年期を生理的・社会的な側面と関連させ、自己形成と心理的発達成熟のプロセスを学ぶ。自己アイデンティティ形成の意義と過程を検討し、自己分析などを組み込みながら体験的な学びを進める。 また、心理援助の観点から、青年の意識や行動と心理的適応について学ぶ。青年のストレスとメンタルヘルス活動に関する事項、およびスクールカウンセリングと予防的心理援助について学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 基幹科目	生涯発達心理学	人間の発達、成人したら終わるものではなく、一生継続ものであるという生涯発達の考え方がとられるようになってきた。授業では、これまでに分かってきた研究の知見を紹介することを通して、成人期以降の発達について考える。最初に、成人発達研究の歴史と背景や成人発達研究に応用されている心理学の諸理論を学んだ後に、青年期から老年期までの発達課題について順に論じる。具体的には「青年期（自我同一性の達成 対 拡散）」「成人期（親密性 対 孤立）」「中年期（生殖性 対 停滞）」「老年期（統合 対 絶望）」などである。	
	発達臨床心理学	通常学級に在籍する発達障害の支援は、教育、心理学、医療などの連携を必要とする。その中で臨床心理学の技術が重要な役割を果たしている。そのために必要最小限の基礎知識と実践に通じる臨床技術に関する専門的な理解を学ぶ機会とする。特にLD、ADHD、高機能自閉症の臨床像と、その支援の方向性に触れ、支援方法の実際についても解説する。	
	学校臨床心理学	本講義では、①学校カウンセリングの理論、②不登校、いじめ、無気力、反社会的行動、発達障害から生じる諸問題など、学校場面で生じる子どもの不適応問題の理解とアセスメントの方法、③虐待、家庭内暴力、家庭崩壊など学校期に家庭で生じる諸問題の理解、④子どもの不適応問題に対する心理臨床的支援の方法、④スクールカウンセラーや学校内相談員と、校内関係教員および校外専門機関との連携方法、などについて具体的事例をもとに講義を行う。また心身症や摂食障害など、医療の対象となりうる疾患や問題の理解と対応についても学ぶ。	
発展科目 (人間科学)	聴知覚心理学	私たち人間の基本的機能である外界に関する認識のうち、聴知覚、即ち「聴いて知ること」について、様々な面から論じる。受講生が「音」に関する研究を独力で実施するために必要な、「音」についての基本的な物理学的・生理学的知見について解説した上で、知覚心理学の文脈からは「音」は外在する物理現象でも体内で生じる生理現象でもなく、個体と環境との相互依存関係として成立する知覚（聴覚経験）であることを論じる。これらを踏まえ、いわば“傍観者”として、ただ聴くことで環境と関わる聴取者に知覚される経験の諸特性だけでなく、自ら環境において「音」を生成する行為者に知覚される経験の諸特性について述べる。	
	運動視知覚心理学	私たち人間の基本的機能である外界に関する認識のうち、運動の視知覚、即ち「動きを、見て知ること」、「動くものの知覚」について論じる。視覚神経系における運動検出のメカニズム、運動残効など相対的に基礎的・生理学的な現象から、仮現運動、アニメーション（動画像）知覚の心理学的基礎、アニメーション固有の動きの表現、複数の動きのあいだに知覚される因果を始めとする多様な関係の知覚まで、多面的に論じる。運動の視知覚への理解は、人間の視覚機能のみならず、映像機器の開発・改良など応用的な領域でも必要とされる。	
	実験的行動分析学	本講は基幹科目「学習心理学」に対応する発展科目である。学習心理学の根幹を成す動物被験体を中心とした実験事例や、数理的アプローチやコンピュータシミュレーションなどを駆使した最新の理論を通して、学習心理学のより基礎的な部分を学ぶ。加えて、そうした基礎的な知見が最新の応用行動分析学にどのように活かされているのかを扱う。本講を通じて学生は、学習心理学の根幹となる知識に加え、実験の具体例とその応用へのつながりから科学的な思考力が養われ、また自らもそうした研究に参画するための発想力が鍛えられる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  発 展 科 目 ( 人 間 科 学 )	比較認知科学	比較認知科学は、比較心理学や動物行動学など様々な研究領域を背景に持つ融合的・学際的な学問であり、ヒトをも含む様々な動物の認知機能を比較分析して、認知機能の進化を明らかにしようとする学問である。本講義では、動物の認知機能とヒトの認知機能の比較により、ヒト独自の認知機能について学ぶ。また、比較認知科学に關与する諸分野についても紹介する。その上で、比較心理学・学習心理学・発達心理学など各心理学の立場から、認知機能の進化について理解を深めることを目指す。	
	認知神経心理学	認知神経心理学は、脳損傷者の高次脳機能障害を手がかりとして、脳との関連性を意識しつつ、知覚、記憶、注意、言語、思考、行為といった人の認知機能の特徴について検討する神経心理学の一領域である。本講義では、上記の認知機能のうち、特に、視覚認知を取り上げ、視覚の高次脳機能障害を示す代表的な神経心理学的症例を紹介しながら、視覚認知の成立にかかわる個々の認知過程や、それらと関連する脳領域について考えていく。あわせて、当該領域に関する最新の研究動向についても解説する。	
	臨床神経心理学	脳損傷後遺症の臨床と密接なつながりをもつ神経心理学では、高次脳機能障害を通して私たちの認知機能を理解しようとする認知神経心理学的なアプローチのみでなく、高次脳機能障害の当事者を神経心理学的に支援することをめざす臨床神経心理学的なアプローチも非常に重要である。本講義では、高次脳機能障害者の日常生活や社会復帰における問題点や、それらを解決するためのさまざまな支援方法を紹介する。そして、高次脳機能障害という障害そのものだけでなく、障害を抱えた当事者に対する各自の理解を促していく。	
発 展 科 目 ( 産 業 ・ 社 会 )	社会的認知論	社会心理学の中でも個人内過程を分析対象とするテーマ群についての概論的講義を行う。人々が社会現象を解釈する際に発生する根本的な帰属の誤りや、社会的推論におけるヒューリスティクスについて、実際の社会問題との関わりの下に理解する。また、対人状況における様々な認知の歪みと呼ばれる現象について、実験結果をもとに理解する。社会的な要因が個人の行動を自覚できないうちに変容させる例として、Barghの自動的動機モデルについての紹介を行う。また、態度の形成と変容過程について、態度の潜在的指標の意義を交えて紹介する。	
	社会行動論	社会心理学に関する基礎的知見を社会生活の諸側面から再評価する内容の授業を行う。第1に、人々の消費や投資、貯蓄などの経済行動を説明し、予測するモデルについて紹介する。報酬の確率と時間による割引の研究や、プロスペクト理論等がこれに当たる。第2に、人の幸福を規定する要因に関する個人および国家レベルでの幸福度研究について理解を深める。第3に、行動の文化間比較についての講義を行う。とくに分配的正義やリーダーシップに関わる認識の文化比較を行う。第4に、対人行動を進化の視点から解釈するための講義を行う。	
	消費者行動論	消費者の行動を説明し、予測するための心理学的知見についての理解を深めるための授業を行う。最初に社会心理学における説得的コミュニケーションに関する多くの知見をまとめ、これらが宣伝・広告にどのように応用可能かを論じる。次に消費者が情報を探索し、複数の商品の中から選択する過程を、認知心理学と行動意思決定論の枠組みを中心に理解する。さらに、ブランド形成に基づいたマーケティング手法に関して、心理学実験の成果を中心に紹介する。さらに、今日利用されつつあるビッグデータの可能性と、今後のマーケティングの変化の方向についての講義を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  ( 産 業 ・ 社 会 )	組織心理学	職場における人々の行動を理解し、また円滑化することに関わる知見についての講義を行う。最初に、職場における人間関係のあり方を、リーダーシップのあり方によって分類し、それらの特徴を理解する。次に、職場での業務に対する動機づけを規定する要因の中でも、特に組織的要因およびコミュニケーションのあり方に焦点を絞って講義を行う。さらに、職場でのメンタルヘルスを規定する要因と、メンタルヘルスに関わる具体的サポートの方法についての基礎的知識を講義する。最後に、従業員の職場内でのキャリア形成に関する組織的な取り組みを紹介する。	
	心理学調査法	本授業の目的は、調査法を用いた学術論文を読みこなし、調査法を用いて研究を行うための基礎知識を身につけることである。そのため、調査法の理論を学ぶと共に、クラス内で調査を行い、統計ソフト（SPSS）を用いたデータ解析（因子分析、分散分析、重回帰分析など）、WordやExcelを用いた図表の作成、レポート作成を授業で行う。本授業は、これまでに学んだ方法論の授業内容の理解を前提としており、その習得は、専門演習や卒業研究に役立つものである。	
	人間関係発達論	生涯発達心理学は、発達を「誕生から死までのプロセス」と位置づけ、成人期以降の人間の心理的变化を研究している。本講義では、エリクソンの発達段階説（ライフサイクル論）に基づき、早期成人期（親密性：愛という課題）・中年期（生殖性：世話という課題）・老年期（統合性：英知ならびに「死の受容」という課題）について取り上げ、各段階の課題達成において重要とされる対人関係について理解し、「人生を適応的に生きる」ことの意味と意義について考えを深めることを目指す。	
発 展 科 目 ( カ ウ ン セ リ ン グ )	カウンセリング技法論	心理援助法としてのカウンセリングの基礎を学びその意味を理解する。カウンセリングの基礎理論となる精神分析学と人間性心理学を学ぶ。カウンセリングの経過における受理、初回面接、援助関係の形成やラポール形成の技法上の課題を学ぶ。表出的な極から指示的な極にわたる技法の広がり理解し、受容・共感・対話の意義を学ぶ。見立てと心理援助の計画、援助の目標設定の意味、カウンセリングのルールや取決め、構造の意義、カウンセリングの倫理について学ぶ。	
	カウンセリング実践論	心理援助の領域に応じた、また対象に応じたカウンセリングの形態を学ぶ。主に、医療保健領域、教育領域でのカウンセリングの実践について、実践例を通して学ぶ。医療保健領域では、精神科入院、外来、総合病院、開業クリニック、保健所など、教育領域では教育相談、スクールカウンセリング、学生相談、保育カウンセリングなどがある。さらに、事故災害時の被害者被災者支援や支援者の支援の実際にも触れる。対象別では、幼児期、思春期青年期、高齢者へのカウンセリングを通して、カウンセリングの広がりを学ぶ。	
	認知行動療法技法論	本講義では、認知行動理論を踏まえながら、認知行動療法の実践について学ぶ。認知行動療法とは、伝統的な行動療法の考え方に加え、人間の認知の機能的側面を重視し、認知の変容を行動の変容とともに治療の標的にしようとする点に特徴がある。そこで、認知行動療法の歴史や基本的発想、理論的基礎を概観するとともに、代表的な技法の進め方について理解することを目指す。具体的には、認知的再体制化、暴露反応妨害法、問題解決訓練、行動活性化法などの技法について、想定される症状に対する治療メカニズムと合わせて学習する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  ( カ ウ ン セ リ ン グ )	認知行動療法実践論	本講義では、認知行動理論や代表的技法の治療メカニズムを踏まえながら、症例研究を通して認知行動療法の実践について学ぶ。認知行動療法とは、伝統的な行動療法の考え方に加え、人間の認知の機能的側面を重視し、認知の変容を行動の変容とともに治療の標的にしようとする点に特徴がある。そこで、基本的な認知行動療法の進め方に沿って、ケースフォーミュレーションの核をなす多様な面接法および測定法と治療技法とのつながりや認知行動療法における治療者の役割を理解し、実践の基盤とすることを目的とする。	
	犯罪心理学	私たちの暮らす社会が安全・安心なものであるために、犯罪心理学を学び、防犯のための対策を考えていくことは大切である。本講義では、犯罪心理学の基礎理論を学び、事例を通して、人がなぜ犯罪に至るのかを考える。個人の資質と生育環境、集団の力、学校・職場・地域などについて、新たな視点を獲得し、加害者処遇と被害修復について学び、各自の犯罪防止に貢献できる力を身につける。	
	性格心理学実践論	性格に関する理論である特性論および類型論をもとに性格検査の作成方法を学び、専門演習や卒業研究において、独自の性格検査を用いた研究が行えるための技法習得を目指すとともに、さまざまな領域における調査に応用可能な基礎技法も身につけることを目指す。 まず、特性論に基づく性格検査、次に、類型論に基づく性格検査について、その作成手順である①項目の収集方法、②項目の精選方法、③信頼性の検討方法、④妥当性の検討方法を習得する。さらには、検査施行や結果の扱いに関する倫理的配慮についても学ぶことにする。	
	心理臨床支援技法論	本講義では、体験的学習を加えながら、臨床現場における実践的な臨床心理学を学ぶことにする。講義では、心理検査、そして、心理療法の2つの領域について、臨床フィールドでのエピソードを交えながら解説し、実学としての臨床心理学の実際を学習する。 また、教授者自らが実際に体験した事例などを引用しながら授業を進め、知識の習得だけを目指すのではなく、臨床家としての体験を通して心理臨床について学習する。	
発 展 科 目  ( 発 達 支 援 )	こども心理療法論	子どもに起こる様々な心の問題とその背景を理解するとともに、実際に子どもが問題を抱えた時に、どのように相談を受け、どのように支援していくかについて学ぶ。後半は、主に子どものプレイセラピーを取り上げ、その理論的背景、プロセス、その実際と留意点などを踏まえながら子どもの心理療法について学ぶ。目標は、子どもの心理療法に関する理論や技法の習得ではあるが、子どもの詩や絵本、事例検討などを通して子どもの心を理解すること、子どもの心を受け止めること、一人の大人として何ができるのか、何ができないのか、どうすれば良いかについて真剣に考える機会としたい。	
	応用行動分析学	発達支援領域において用いられる心理学的アプローチである応用行動分析学に基づいた行動変容法技法について理解することを目的とする。主なテーマは、行動の観察と記録、行動のグラフ化と変化の測定、基本的な行動原理（強化、消去、弱化）、三項随伴性の理解、適切な行動の形成（シェイピング、チェイニング）、問題行動の低減（機能分析、分化強化）、自己管理、行動契約、認知行動変容などである。学術的な先行研究と実験的な臨床事例を踏まえて、様々な臨床技法の目的、手続き、留意点について説明する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 目 目 ( 発 達 支 援 )	社会環境行動論	応用行動分析学が用いられる地域社会の様々な領域について理解し、具体的にどのような適用事例があるのか理解することを目的とする。主なテーマは、早期療育、学習支援、教材開発、教員向け行動コンサルテーション、非行少年の更生と自立、地域社会での障害者支援、子育てに関する保護者・家族支援、障害者雇用企業の環境整備、従業員のパフォーマンスマネジメント、経営者のコーチングなどである。こうした適用事例を知ることで、社会問題に対して自ら解決方法を提案できるようにする。	
	発達障害児教育論	発達障害への教育的支援は、公教育における特別支援教育を中心に治療教育的アプローチ、心理教育的アプローチなどが行われている。その領域は、学習支援、社会性獲得支援、自立準備支援などである。こうした支援方法も、その背景にある実態を把握するための心理アセスメントなどを活用することになる。本講義では、こうした方法論を学び、実践に活かせる知識を身につける。	
	発達障害者自立支援論	発達障害への支援の最終目標は「自立」である。しかし、発達障害者の臨床像には、社会自立のバリアとなるものも少なくない。また、企業などの場においても十分な理解が進んでいないことも多く、内的要素、外的要素ともに課題が多いのが自立支援領域の現状である。本講義では、こうしたことを一つ一つ整理し、どのような支援が必要なのか、また、自立というテーマから学校臨床への提案なども行う。	
臨床実践科目	心理面接実習	心理面接の基本技能を習得する。援助的な対人関係の構築と応答の基礎を練習する。実際の練習方法は、以下の方法から構成する。非言語的交流を含めた傾聴訓練をはじめ、紙上応答訓練、VTR視聴によるモデル学習、面接場面のロールプレイ、模擬心理面接の実施と逐語分析による検討である。倫理的な配慮を含め、実践上の心理面接の原則を理解し実践できることを目指す。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 臨 床 実 践 科 目	臨床心理学概論	<p>(概要) 臨床心理学とはどのような問題を扱う学問なのか、その成り立ちの歴史から学び、次に、各発達段階における臨床心理学的問題、そのアセスメント、その支援方法について概観し、臨床心理学各論を体系的に理解する。次に、地域における臨床心理学的問題についても学ぶ。さらに、各分野における倫理的配慮についての理解も深める。 (オムニバス方式／全15回)</p> <p>(9 竹内康二／3回) 臨床心理学とは何か、その歴史から成り立ちについて学ぶ。また、乳幼児期の臨床心理学的問題、そのアセスメント、そして、その支援方法について概説する。</p> <p>(4 小貫 悟／3回) 児童期の臨床心理学的問題、そのアセスメント、そして、その支援方法について概説する。</p> <p>(7 福田憲明／3回) 思春期・青年期の臨床心理学的問題、そのアセスメント、そして、その支援方法について概説する。</p> <p>(11 藤井 靖／3回) 成人期の臨床心理学的問題、そのアセスメント、その支援方法について概説する。</p> <p>(2 石井雄吉／3回) 災害支援を含めた地域における臨床心理学的問題、そのアセスメント、その支援方法について概説する。</p>	オムニバス方式
	精神医学概論	<p>近年のチーム医療において、専門職として医療に従事する際に共通認識が重要となる。心理学の立場で精神障害と接し、治療に必要な精神医学の基礎的事項について学び、精神疾患に関する理解を深めていくことを目標とする。種々の精神障害の症状、診断、治療の概要を学ぶ。精神医学の成り立ちと、社会との関わり、医療倫理と患者の人権擁護、チーム医療の概念と連携協働、エビデンス・ベースドとナラティブアプローチなどにも触れる。</p>	
	心理臨床・実践職能論	<p>心理臨床、心理援助が実際にいかに実践されているかを体験的に理解する。職業人として修得すべき職業的資質や技能について知る。また、心理援助活動に関連する法規、社会制度、心理職としての行動規範や倫理について学ぶ。あわせて、実践の自己点検、職能の維持向上の重要性、および実践上のリスクマネジメントについても学ぶ。</p>	
	キャリア形成科目	心理学で拓くキャリア	<p>本授業の目的は、心理学科の学生が3年生の前期に、自分の進路を現実的に考え、進路選択とそのため活動の自発的に行うことを促すことである。そのために、自己分析・業界研究などを行うとともに、実社会での生の情報を得るために心理学科の卒業生や企業の人事担当者をゲストスピーカーとして招き、社会で働くことの意味や就職活動で注意すべきことについて伺う。最終的には、学生一人ひとりが、希望する進路を定め、それを実現するためには、どのような活動を3年生の夏休みから卒業までのどのタイミングで行うべきかについて現実的な計画を立てられるようにする。</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 目 目	専門演習 1 A	3 年生前期に担当される、少人数制のゼミ形式での演習である。担当教員が専門とする領域について、研究方法についての指導を受けながら、学生自身が実証的な研究を行う。文献や日常場面で見出した問題から検証可能な仮説を構築して設定し、その仮説を検証するのに適した実験計画法や研究方法を選択してデータを収集する。	
	専門演習 1 B	3 年生後期に担当される、少人数制のゼミ形式での演習である。担当教員が専門とする領域について、データ分析の手法や文献の参照に関する指導を受けながら、学生自身が実証的な研究を完成させる。学生は、「専門演習 1 A」において収集したデータを詳細に分析し、文献と比較して考察し、結論を下す。研究成果を公開の場で他者に対してプレゼンテーションし、質問に答えたり議論することを以て、3 年生としての研究を完成させる。	
	専門演習 2 A	4 年生前期に担当される、少人数制のゼミ形式での演習である。担当教員が専門とする領域について、研究方法についての指導を受けながら、学生自身が実証的な研究を行う。「専門演習 1 B」での研究成果に文献的考察を加えて、或いは、その研究の過程で新たに見出された問題から、さらに発展させた仮説を設定し、その仮説を検証するのに適した実験計画法や研究方法を選択してデータを収集する。	
	専門演習 2 B	4 年生後期に担当される、少人数制のゼミ形式での演習である。担当教員が専門とする領域について、データ分析の手法や文献の参照に関する指導を受けながら、学生自身が実証的な研究を完成させる。学生は、「専門演習 2 A」において収集したデータを詳細に分析し、文献と比較して考察し、結論を下す。	
	卒業研究	担当する教員による総合的な指導を受け、「専門演習 1 A」・「専門演習 1 B」・「専門演習 2 A」・「専門演習 2 B」で得た研究成果を、問題の発見、文献を交えた問題の整理、仮説の構築とその検証、研究結果に関する総合的考察を含む、実証的科学論文の形式に則った卒業論文としてまとめ、さらにその内容を公開の場で他者に対してプレゼンテーションし、質問に答えたり議論することを以て、卒業研究を完成させる。	

# 明星大学 組織の移行表

## 平成28年度

### ●明星大学 ・通学課程

学部等	学科等	入学定員	収容定員
理工学部	物理学系	400	1,600
	生命科学・化学系		
	機械工学系		
	電気電子工学系		
	建築学系		
環境科学系			
小 計		400	1,600

人文学部	国際コミュニケーション学科	100	400
	人間社会学科	80	320
	心理学科	110	440
	日本文化学科	100	400
	福祉実践学科	60	240
小 計		450	1,800

経済学部	経済学科	300	1,200
------	------	-----	-------

情報学部	情報学科	140	560
------	------	-----	-----

教育学部	教育学科	320	1,280
------	------	-----	-------

経営学部	経営学科	200	800
------	------	-----	-----

デザイン学部	デザイン学科	120	480
--------	--------	-----	-----

通学課程合計		1,930	7,720
--------	--	-------	-------

### ・通信教育課程

教育学部	教育学科	2,000	8,000
------	------	-------	-------

### ●明星大学大学院 ・通学課程(博士前期課程)

理工学研究科	物理学専攻	10	20
	化学専攻	10	20
	機械工学専攻	10	20
	電気工学専攻	10	20
	建築・建設工学専攻	5	10
	環境システム学専攻	5	10
小 計		50	100

人文学研究科	英米文学専攻	10	20
	社会学専攻	10	20
	心理学専攻	10	20
小 計		30	60

情報学研究科	情報学専攻	7	14
--------	-------	---	----

経済学研究科※	応用経済学専攻	10	20
---------	---------	----	----

教育学研究科	教育学専攻	10	20
--------	-------	----	----

通学課程(博士前期課程) 合計		107	214
-----------------	--	-----	-----

※経済学研究科は修士課程

### ・通学課程(博士後期課程)

理工学研究科	物理学専攻	5	15
	化学専攻	5	15
	機械工学専攻	5	15
	電気工学専攻	5	15
	建築・建設工学専攻	3	9
	環境システム学専攻	2	6
小 計		25	75

人文学研究科	英米文学専攻	3	9
	社会学専攻	3	9
	心理学専攻	3	9
小 計		9	27

情報学研究科	情報学専攻	3	9
--------	-------	---	---

教育学研究科	教育学専攻	3	9
--------	-------	---	---

通学課程(博士後期課程) 合計		40	120
-----------------	--	----	-----

### ・通信教育課程(博士前期課程)

教育学研究科	教育学専攻	30	60
--------	-------	----	----

### ・通信教育課程(博士後期課程)

教育学研究科	教育学専攻	3	9
--------	-------	---	---

## 平成29年度

### ●明星大学 ・通学課程

学部等	学科等	入学定員	収容定員	変更の事由
理工学部	物理学系	400	1,600	
	生命科学・化学系			
	機械工学系			
	電気電子工学系			
	建築学系			
環境科学系				
小 計		400	1,600	

人文学部	国際コミュニケーション学科	100	400	平成29年4月学生募集停止
	人間社会学科	80	320	
		0	0	
	日本文化学科	100	400	
	福祉実践学科	60	240	
小 計		340	1,360	

経済学部	経済学科	260	1,040	定員変更(△40)
------	------	-----	-------	-----------

情報学部	情報学科	140	560	
------	------	-----	-----	--

教育学部	教育学科	350	1,400	定員変更(30)
------	------	-----	-------	----------

経営学部	経営学科	200	800	
------	------	-----	-----	--

デザイン学部	デザイン学科	120	480	
--------	--------	-----	-----	--

心理学部	心理学科	120	480	学部の設置(届出)
------	------	-----	-----	-----------

通学課程 合計		1,930	7,720	
---------	--	-------	-------	--

### ・通信教育課程

教育学部	教育学科	2,000	8,000	
------	------	-------	-------	--

### ●明星大学大学院 ・通学課程(博士前期課程)

理工学研究科	物理学専攻	10	20
	化学専攻	10	20
	機械工学専攻	10	20
	電気工学専攻	10	20
	建築・建設工学専攻	5	10
	環境システム学専攻	5	10
小 計		50	100

人文学研究科	英米文学専攻	10	20
	社会学専攻	10	20
	心理学専攻	10	20
小 計		30	60

情報学研究科	情報学専攻	7	14
--------	-------	---	----

経済学研究科※	応用経済学専攻	10	20
---------	---------	----	----

教育学研究科	教育学専攻	10	20
--------	-------	----	----

通学課程(博士前期課程) 合計		107	214
-----------------	--	-----	-----

※経済学研究科は修士課程

### ・通学課程(博士後期課程)

理工学研究科	物理学専攻	5	15
	化学専攻	5	15
	機械工学専攻	5	15
	電気工学専攻	5	15
	建築・建設工学専攻	3	9
	環境システム学専攻	2	6
小 計		25	75

人文学研究科	英米文学専攻	3	9
	社会学専攻	3	9
	心理学専攻	3	9
小 計		9	27

情報学研究科	情報学専攻	3	9
--------	-------	---	---

教育学研究科	教育学専攻	3	9
--------	-------	---	---

通学課程(博士後期課程) 合計		40	120
-----------------	--	----	-----

### ・通信教育課程(博士前期課程)

教育学研究科	教育学専攻	30	60
--------	-------	----	----

### ・通信教育課程(博士後期課程)

教育学研究科	教育学専攻	3	9
--------	-------	---	---